
また、この場所で

境京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また、この場所で

【Nコード】

N3451I

【作者名】

境京

【あらすじ】

思い出の場所、思い出の出来事、思い出の人。

今でも、覚えていますか？ 心のどこかに、残っていますか？

プロローグ

寒い日というのは、どうも苦手だ。

小学生の私は春休みに入り、ある友人と遊んでいた。

私は小学生の頃は特に仲の良い友人が二人居て、私を含めたその三人でよく遊んでいた。

今はその中の一人と一緒に居る。

一緒に居たのは、小野寺雪乃という同級生で、小学校に入り彼女は前の席に座っていたという理由もあって、私が最初に仲良くなった人物であり、一番仲の良い友人である。

私はそんな雪乃と公園のベンチに座り、商店街で買ったコロツケを食べながら話していた。

こうしていられるのも、今日で最後である。

私は明日、ここを離れることになる。親の仕事の都合で引越しをするのだ。もちろん、学校も転校することになる。

「たまには遊びにおいでよ」

「うん・・・」

「向こうでもがんばるんだよ」

「うん・・・」

私は、「うん」としか言えなかった。ここで最後に遊べる日だったのに、私は俯いたままで、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

もう時間は夕方の五時、子供は家に帰らなくてはいけない時間である。空はすっかり薄暗くなり、公園には私達以外は居なくなっていた。

「そろそろ帰らないといけないね」

雪乃が座っていたベンチから腰を上げた。

子供ながらも私のことを察してか、明るく振舞ってくれた。本当に感謝している。しかし、明るい雪乃の目からは、薄っすらと涙が見えた様な気がした。

「それじゃ、またね」

「うん」

「ばいばい」

「ばいばい・・・」

それは、この場所で私達が最後に言った言葉だった。

第一章

四月。それは一年間という中で一番、春、という言葉が相応しい月なのかもしれない。

冬が終わり、冷たい空気が暖かい空気に変わる。今まで厚着をしていた服装も少し薄手にしようと、そう思えてくる。

高い空を見上げ、ようやく暖かくなった空気を肌で感じる。桜の花弁が舞い散り、目の前を横切った。花弁の色はピンクでは無く、それこそ本当に桜にしか使うことの出来ない桜色という色だと思える。

空から視界を少し落とし、周りを見渡す。

私の周りには、まだ慣れない制服を着て、新たな高校という学び舎に向かう人達が多く見られる。私もその中の一人なのだが。

通学中の道は緩やかな坂になっており、その横には桜の木が続いて生えている。最初の間はこの桜で坂道を紛らわすことも出来るだろう。

その坂の先を進んでいくと、懐かしい建物が見えてきた。私が行く高校である。小さな頃から見ていた建物だ。決して大きいわけではないが、周りが何も無いということ、校庭がとにかく大きい。

そういうこともあって、私、神代七海は無事に高校生になることが出来た。私立校ということもあり、多くの中学から来た生徒も多い。だが、どんなに頑張っても都会とは言えないこの町だ、少なからず知っている顔はあるだろう。

転校前の小学生時代の友人が。

そう、つまり私は昔居た地に戻ってきたということだ。理由はまた親の仕事で、元の場所に帰るといったことだった。転勤でこちらに帰るといふことになり、そうなれば私も生まれたこの地で高校受験をすることを余儀なくされた。元々こちらは公立、私立問わず学校の数が少なかつたことで、志望校を決めるのは然程難しくは無かつ

た。

ここに来るのは四年振りだった。

引越した次に日には、久しぶりに帰ってきた街を見物した。四年振りということもあり、多少の変化は勿論あったが、多くの変化は無かったことに私は少し安心した。自分が生まれた場所が、四年ぶりに来ると全く違う風景というのはショックである。

商店街のコロッケも未だに健在だったのは嬉しかった。

そして最後にもう一つ訪れた場所がある。と言うよりは、確認をしたかった。

雪乃の家である。

雪乃の家は商店街から少し離れた所にある団地だ。私はその団地を目指した。

団地に着いた頃には、辺りはすっかり夕暮れになっていた。四年振りだったので、団地の場所が少し曖昧な記憶だったが、ちゃんあることにホッとした。雪乃の家は三号棟の二階だった。これはよく覚えている。私は、三号棟入り口でポストを見付け、小野寺のプレートを探した。

「小野寺・・・小野寺・・・」

ポストには小野寺の苗字は無かった。二階のポストは空白になっている。私は階段を上り、二階に向かった。しかし、やはり小野寺の表札は無く、誰も住んでは居なかった。

違う人が住んでいたとしても、失礼は承知でインターホンを鳴らした、ドアをノックもした。しかし、一切の反応は無かった。

「雪乃、居ないんだ・・・」

私は、それを確認すると階段を下りた。

少しは雪乃に再会できると思っていたが、あまり信じたくは無かったが、雪乃の家はそこにはもう無かった。

この四年間の間に、恐らくは引越したのだろう。

雪乃に会えると思っていた私は、なんともいえない気持ちになり、その場所を後にして家に帰ることにした。

家に帰っても、そのことがずっと頭にあった。とても残念ではあったが、私も引越した身だ、仕方は無かった。諦めを付けるしか無かった。

そう私は昨日のことを思い出していると、既に学校の正門の前に着いていた。『入学式』という看板がでかかと立っている。これを見ると、本当に私は高校生になったんだと実感をした。

私は顔を上げ、校舎を眺めながら大きく息を吸い込深呼吸をした。そして、一步一步と歩み、学校へと進んだ。

私は門を抜け、校庭へと進んだ。

校庭の中には、知っている者同士で話をしている生徒や、親と一緒に話している生徒、一人で式が始まるのを待っている生徒があちらこちらに居る。そして、何よりも人が多く集まっている所が、クラス発表の掲示である。同じクラスになれたのか、手を取り合って喜んで居る生徒が居る。私もそこへ向かい、自分がどのクラスなのかを確認しに行った。

すいません、すいません、と掲示板の周りの生徒を掻き分け、前へ進む。進むうちに、ようやく掲示板が確認できる場所へ到着した。今年の一年は、七組までである。男女共学の学校なのだが、商業高校ということもあり、七割、いや、八割は女子が人数を占めている。

「あーと、神代、神代・・・」

一組から順番に探したのだが、名前はすぐに見つかった。一組に私の名前があった。出席番号は八番である。しかし私はその二つ先の出席番号四番の名前を見て、驚くべき物を見付けた。

「え・・・、この名前って・・・」

私の目の先に、その名前はあった。

小野寺雪乃。

「小野寺・・・雪乃・・・、これって雪乃のこと？」

只の同姓同名なのか、それにしては偶然過ぎる。

昨日、確かに雪乃の家には誰も住んでいなかった。雪乃が引越したのとは違くない。私の推測ではあるが、恐らくは引越しはしたが、あまり遠い所には引越してはいなく、そこからこの高校を受験し、今年からここに通うということだろう。

私はその場から離れ、雪乃を探した。校庭のあちらこちらを走って回った。雪乃が居ることを信じて。

広い校庭に居る沢山の生徒。一人一人の顔を見る。

「う……違う……」

違う……違う……。どれも雪乃じゃない。

四年の間に容姿が変わったのか？雪乃の面影がある者は一人も居ない。「もしかすると、本当に只の同姓同名？」そんな不安が横切った。

「やっぱり、違うのかな？」

私は、最後にもう一度探してみようと、歩みだしたその時だ。

「ちよつと、ごめん」

後ろから、私を呼び止める声がし、振り返った。

「はい？」

私は振り返りながら答え、振り返った先には、一人の女生徒が居た。

スラツと細身の長身で、目鼻立ちがハッキリとした美人だが、ニコニコとして柔らかな表情のどこか幼さを感じた女の子だった。

「もしかして……七海？」

その女生徒は、私の名前を知っていた。

「そうだけど……」

申し訳ないが、私はその女生徒が分からなかった。

「あれ？その顔は……ふふつ、私のこと分らないみたいだねえ」

「ご……ごめん」

その女生徒はニヤリと微笑みながら言った。

「へへへ、香苗だよ。覚えてるかな？」

香苗………。思い出した！彼女の名前は近田香苗だ。香苗は私の小学校の頃の友人で、雪乃と共によく遊んでいた。活発な女の子で、あっさりとした性格をしていて話し易かったのを覚えている。当時は髪を長くしていて、背はあまり大きくはなく、背の順で並ぶと、前から数える方が早かった。しかし、今は髪をセミロングにしており、身長は百六十センチ前半位、百六十五ぐらいだろうか。いい娘さんになったもんだ。

「香苗！本当に香苗！？」

「そうだよ！久しぶりだね！ってか、こっちに帰って来たんだ！」

「そうだよ、四年振りにね。それにしても、よく分かったね」

「まあね。掲示板見て『神代七海』ってあったから、もしかしてって思ってた」

よく気付いたもんだ。一クラスの数人数は少ないとは言っても、三十五人は居る。ましてや七クラスの中から。

そして、私は香苗と話しをしていて、掲示板で思い出した。

「ねえ、香苗！雪乃見なかった？」

「雪乃？雪乃って……小野寺雪乃のこと？」

「そう！」

「いや、見てないけど。てか、雪乃もこの高校なの！？」

「あの雪乃かは分からないけど、掲示板に書いてあってね」

「ホントに！？それってやっぱり雪乃でしょ！同姓同名ってことは無いと思うよ。雪乃は何組だったの？」

「え……一組？私達と同じなの？」

「香苗も一組なの！？」

「そうだよ、言ってなかったけど……でも、雪乃には気付かなかったよ。雪乃、引越したから、まさかこの高校に来ると思わなかったよ」

「私も、雪乃が引越したなんて知らなかったよ」

香苗も私と同じ一組ということを知り、とても頼もしく感じた。誰

も知らない人間の中にずっと居るより、知っている人間、むしろ、仲の良かった者に出会えたのには心が和らぐ。これで雪乃が居ればそれ以上のことは無いのだが。

「あ、もう少して式が始まっちゃうよ。とりあえず体育館に行こうよ」

香苗が言い出した。それに対し、私は時計を見ると、既に時間は式の十分前を過ぎていた。

「ほんとだ、じゃあ行こうか」

私達は一旦、体育館に行くことにした。

体育館の中には既に多くの生徒が居た。パイプ椅子が並べられ、各クラスごとに座れる様にボードが立てられている。私達一組は一番前方の左側で、椅子には番号が振り分けられている。どうやら出席番号順に並ぶ様だ。

「私、六番」

「私は十二番だよ。そっぴや雪乃は何番？」

「雪乃は……四番だけど……」

「……居ないね……」

雪乃の席には誰も座ってはいなかった。

式の開始の時間が来て、座席は埋め尽くされた。それでも、まだ、四番の席には誰も座ってはいない。私は、体育館の周りを見渡したが、全ての扉は閉められ、誰も入ってくる様子は無かった。

式が始まり、舞台の上には多くの大人達が集結している。一番中心に座っているのが校長だろう。六十歳後半ぐらいの大柄の男性だ。次々と挨拶が始まり、ありがたいだろう言葉を頂いているが、正直退屈ではあった。周りの生徒も同じ様になっていた。私は、目を逸らしていると、香苗と目が合った。目が合うと香苗は微笑みながら手を振ってきたので、私も腰の辺りで小さく手を振り返したが、あまり入学式からふざけるのも如何なものなので、私はすぐに前を

向き、姿勢を戻した。その後少しあくびをしてみました。

各クラスの担任の挨拶もあった。私達一組の担任は、平下先生という若い女の先生で、おっとりした人だった。

式が始まって二時間半程が経った頃、ようやく終わり、閉式になった。本来、ここからは各教室に行き、担任からの挨拶があるのだが、この高校はそれが明日に行う様である。私達はこの後、退場して、今日はそのまま帰るのである。

私は、退場した後再び香苗と合流した。

「雪乃、結局来なかったね」

「……うん」

入学式に雪乃が来なかったことに、私は少し落ち込んだ表情をしていた。その時に、香苗は言い出した。

「ねえ、今から暇？久しぶりに会ったんだし、どっか食べに行こうよ！お腹減らない？」

私を氣遣ってか、香苗は私を食事に誘ってくれた。今日は本当に、香苗には感謝しないとイケない。

「それじゃ、行こうか」

私達は学校を後にして、門を出ようとしたときに香苗が足を止めた。

「うーん……ほんとだ。小野寺雪乃……」

……。確かに雪乃の名前があるね。漢字も全部一緒だよ」

香苗の目線の先には、クラス発表の掲示板があった。そういえば、香苗はまだ掲示板で雪乃の名前を確認していなかった。

「これ……雪乃だよな？」

「うん、多分……」

私達は少しの間その場に立っていた。その時だった、後ろに誰か立っているのを感じた。それには香苗も同じく感じていたと思う。

そして、その人物が声を発した。

「ねえ、入学式……終わったの？」

私達は振り返った。その先には、一人の見覚えのある女生徒が居

た。私と香苗は彼女の顔を見て、驚きを隠せなかった。

「七海と香苗だよね！？……あれ、僕のこと分らないかな？」

そう彼女が言った。分からない筈がない。昔の面影がすっかりと残っている。彼女は自分のこと「僕」と言っ、間違いない。

「雪乃……だよね？」

「そーだよ！久しぶりだね」

小野寺雪乃はそこに居た。

「雪乃！！！」

「雪乃お！！！」

私達は叫び、雪乃にしがみついた。

「ちよつと！二人とも落ち着きなよ」

「あんた、どこ行つてたんだよお！入学式にも出ないでさ！」

「いや……ちよつと遅れちゃってね。着いたら体育館の扉閉まつてて、入り辛かつたんだよね」

全く、何考えてんだよ。と思つたが、それでも、私達はとてつもなくうれしかった。

雪乃は小柄で華奢な身体つきだった。それは昔からだ。百五十センチ前半といった処か。制服のブレザーの肩がダブついて、袖が手を少し隠している。短く切つた髪が、妙に懐かしかった。

「いやー、七海どうしたの？こつち帰つてきたの？」

「うん、そうだよ！」

「久しぶりだなー！。四年振りくらいかな？」

四年振りに雪乃との会話。懐かしさと、少しの恥ずかしさがあった。

「香苗も久しぶり、ここ受けたんだね」

「うん、私もまさか雪乃がここ受けてるなんて、思つてなかったよー！」

「僕も引つ越してから香苗に会つてなかったもんね」

雪乃と香苗も再会の言葉を交わす。

「雪乃も今から、ご飯どう？私達行くんだけど」

「お！ご飯！行くよ〜！」

雪乃も香苗も、そして私も、お互い違う所へ行き、そして、高校生になって再会する。こんな偶然は無い。

式も終わり、校内は既に人の数が少なくなっていた。賑やかだった校庭も、今ではすっかり静かなものだ。青く澄んだ空に、所々にある白い雲。昼になり、暖かい日光が降り注ぐ中、舞い散る桜の花弁は、この学校に入学した新入生と、再開した私達三人を祝福してくれている様にも感じた。

「これ、もう焼けてるんじゃない!？」

「お！マジで？でも・・・何か赤くない?・・・ま

あ、大丈夫か！」

「いやいや、まだ焼けてないでしょ。お腹壊すよ・・・」

雪乃と香苗が、まだ少し赤い鶏肉を転がしあって、食べれるか食べれないか？そんな会話が店内に響く。

私達は、入学式を終え（事実上、雪乃は遅刻して入学式には参加していない）昼食の為に、少し街に出た。店はこの辺りに詳しい香苗に任せた。私はちよっとした喫茶店か、ファーストフード店だと思っていたが、雪乃が、「ガツツリとした味の濃いのが食べたい」と、その体格に似つかない言葉を発し、香苗も空腹だったのか、その言葉に賛成をし、女子三人が制服を着たまま焼き鳥専門店に行くことに話が進んで、私も賛成するしかなかった。

そんなことを思いつつも、こうして三人で、久しぶりにワイワイと出来るのが、凄く嬉しかった。

「七海？あんま食べてないじゃん」

「いや、あんたらが食べすぎなんだよ」

「何だとっ！僕らは乙女だぞ！」

雪乃が葱間で私を指し、言い放った。まあまあ、と香苗が間に入

る。自分のことを僕と言う女が何が乙女だ。

そんな二人は既に、各三十本、いや、三十五本以上の焼き鳥を食べ、机の上では串の残骸が筒に入って溢れている。焼き鳥を食べに来た、というよりは、焼肉屋で鶏肉を食べている。そんな感じである。別に黙々と食べている訳ではない、私達三人、話をしながら食べている。私は今十五本程度だ、私は至って普通な筈なのだが、こうして見ていると、実は自分は小食なんじゃないのか？と思ってしまう。

焼き鳥の値段は五十円から百円と、安い店なのだが、三十本を超えると流石に結構な金額になるのではと思った。

そして、満腹になった私はコーラを一口飲んで言った。

「ところでさ、雪乃って引越したんだよね？」

「ん？そだよ」

なんとも軽く雪乃は答えた。そして、続けて香苗が質問した。

「こっから近いの？引越すのいきなりだったから、詳しいこと聞いてなかったし」

香苗が言うには、雪乃が引越したのはかなり突然だったらしい。中学一年の頃の夏の出来事で、これといった挨拶が出来ずに引越したとのことである。

「あんまり近くは無いね。電車で一時間半程はかかるよ」

「一時間半！？何でここにしたのよ？」

「いや、だって小学校の頃によくあの高校の周りで遊んだじゃない！それで『高校生になったら絶対ここに入る！』って皆言ってたよね」

「あー………確かに」

言われてみれば、そんなこと言った様な記憶がある。私達三人は小学生の頃よく、あの高校の周りで遊んでいた。そして、私達は「将来、この高校に入学する」と盛り上がっていた。

「でも、そのおかげで皆に会えたんじゃない？」

と、香苗が言い出した。

確かにそうである。私もここに帰ってきて、高校の数は少ないといえど、あの高校を受験したのは、心のどこかにその言葉が残っていたからなのかもしれない。

「しかし、あの頃が懐かしいな。そういや、この前、久しぶりに帰って来たから商店街に行っただけで、コロッケ屋まだあったよ！覚えてる？コロッケ屋」

「おお！あのコロッケ屋！覚えてるよ！」

「ああ、あの店ね。一時期ヤバかったんだよ。潰れかけたからね」

「え！本当に!？」

「やつぱスーパ〜とかで買う人が多くなったからね。子供も減ってきたし」

「でも、まだやってるんだよね？後で寄ってみようよ！」

と、雪乃が言った。どれだけ食べるんだよ……。

「僕ら、よく買ったよなあ。あそこのコロッケ」

「うん、食べながら自転車乗ったら、ハンドルがヌルヌルになったね」

「よく、こけそうになったよね……」

「あれ結構怖いよね。またこけたら凄く痛い。骨にくるって言うか」

「確かに……」

コロッケ一つでよくもまあ、そこまで話が出るものだ。その時、香苗が溜息をついた。常にニコニコして柔らかい表情の香苗が、少し俯いて倦怠な顔をした。

「はあ……」

「どうしたの？香苗？」

「いや、ね。何か……昔のこと思い出して……。楽しかったな、って思ってたね」

そんなことを言う香苗の表情は、今までと違い、大人びた雰囲気だった。

「確かにね。小学生の時を思い出すよ」

「私達、一年生の時から同じクラスだったもんね」

小学一年生……。今から九年前か。

私達三人が、どうやって出会ったのか？少し思い出してみた。

小学一年生になったばかりの日だった。どれくらいだろう。多分、入学して一週間位のときだと思う。

幼稚園から小学校に上がり、幼稚園からの知っている生徒も数人は居たが、クラスはバラバラになり、私のクラスには一人しか居なかった。

しかも、その生徒は男子であり、一度も遊んだことは無い。

周りは知らない子ばかりで、元々あまり積極的な性格では無かった私は、静かな毎日を過ごしていた。というよりは、つまらなく退屈な毎日を過ごしていた。また、初めての教科という物に慣れず、苦戦もしていた。

休み時間の時だった。二時間目終了後の休み時間は二十分あり、私は退屈だった。そんな時だった。

「かみいしろさあ〜ん！！！！」

なんだ、なんだ、なんだ！？私の名前を呼ぶ声と共に、机が揺れた。驚いた私は飛び上がり、その拍子で椅子ごと後ろに転んでしまった。

「うわ！こけた！」

何を言う。お前のせいだ。

しかし、まだ小学一年生の私だ。痛さのあまり泣いてしまった。

「ふえ……………う……………」

「あ……………泣いちゃった……………」

泣いちゃったじゃない。私が泣いてしまったことで、気まずそうにしている少女が目の前に居た。いかにも「やってしまった」という表情だ。

その少女こそが、小野寺雪乃だった。

彼女の苗字が「小野寺」で、私の苗字が「神代」というのもあり、最初は出席番号順で並んでいたの、雪乃は私の前の席だった。

「あ……その……」

「あう……その……」

私はまだ、涙を流したままだった。

「ごめんね！ほんとごめん！」

「うん……大丈夫だよ……」

雪乃は私に対して謝り、私はそれに対して平気だと伝えた。

私は、ゆつくりと腰を持ち上げ、机の端を掴み立ち上がった。そして、倒れていた椅子を立て直し、彼女に言った。

「確か……小野寺さんだよ？何か用？」

まだ、目には涙が残り、鼻が詰まった声だった。

「神代さん、休み時間になったら、いつも蹲って寝てるから……どうしたのになって思っ……具合でも悪いの？」

「ううん……、そんなこと無いよ……」

「じゃあ、どうして？」

「……」

私は俯き、黙り込んでしまった。クラスの環境に馴染めず、皆に話し掛け辛く、毎日こうして蹲っている。なんて答えるのは、恥ずかしいものがあった。ましてや社交的な性格で、友達が多く居る雪乃に言うのはなおさらである。

「暇だから？」

暇？確かにそうだ。暇で暇で仕方がない。早く家に帰りたいと思っていた。

「まあ、暇……かな」

私は、雪乃の言葉の「暇」をそのまま使い、誤魔化して答えた。

こんな私に、折角話しかけてくれた雪乃に対し、そんな言葉でしか答えられなかった自分に対し、非常に腹が立った。

そして、雪乃は更に私に声を掛けてくれた。

「暇なら遊ぼうよ！外に出てさ」

「！」

遊ぼう。それは私にとっては、予期せぬ言葉だった。休み時間になれば、いつも机に俯き寝ている。若干ながら孤立していた存在の私に、遊ぼうと雪乃は声を掛けてくれた。私は嬉しくて、目からまた涙を流してしまった。

「え！？ちよつと！泣かないでよ」。僕、また何かした？」

「ううん、ごめん。大丈夫。……いいよ、遊ぼうよ」

「よかった、じゃあ行こう」

雪乃は私の手を引っ張り、教室を出て行った。

教室を出た私達は、廊下を抜け、階段を下り、校庭に出たから裏門の所へ着いた。裏門は名前の通り、裏に在り、校舎で影になっている小さな門だ。周りには小さな花壇が有り、

「ねえ、何するの？」

一緒に遊ぶのは良いが、一体何をして遊ぶのか？私は疑問に思い雪乃に質問した。

「んー……決まってない」

何と……この娘はすること決めてなくて私を誘ったのですか？

「き、決まってないの……？」

「うん」

「じゃあ、何で誘ったの？」

「だって、神代さんっていつも休み時間に寝てるでしょ？気分悪いのかな？って最初は思ってたけど、でも、ちゃんと毎日学校来てるし、授業中は普通にしてるからさ。もしかして、暇なのかな？って思ってたね。それに、何かいつも寂しそうだったし……」

雪乃は私を気遣ってくれていた様であった。

「幼稚園一緒だった友達とかクラスに居ないの？」

「居るけど……男の子だし、喋ったことも無い……」

「ふーん、そうなんだ……じゃあ、僕が最初の友達かな？」

「友達……友達に……なってくれるの？」

「あれ？僕はもう、友達になってたつもりだけど……」

「あ！友達！私達、友達だよ！」

私がそう言うと、雪乃は「よかった！」という表情で靴の中に入っただけを出していた。

「じゃあ、これからもよろしくね」

「うん、よろしく。小野寺さん」

「いいよ、雪乃で」

「雪……乃……」

何か恥ずかしかった。本人はそう呼んでくれと言ってくれているが、やはり何か恥ずかしかった。

「じゃあ……私のことも七海でいいよ」

「わかった！七海！」

自分で言ったにも拘らず、呼ばれてみると恥ずかしかった。

しかし、外に来てみたのは良いが、することが無かった。雪乃も「誘ってみたけど、することが無い……」といった表情をしている。その時だった、とにかく何かしないと、と思ったのが雪乃は辺りに何か遊べる物が無いのかと、掃除用具の入ったロッカーを物色しだした。すると、雪乃が「あっ！」という声を発し、ロッカーの中から何かを見つけ出した。

「七海、良いもん見つけたよ」

そう言うと、雪乃はロッカーの中から何やら茶色い玉を出してきた。正直に言ってあまり綺麗な物では無かった。

「何……それ？」

「ソフトボールだよ」

私は恐る恐る雪乃に近付き、手に持っているソフトボールを見た。確かに、ソフトボールではあるが、かなり使い古していた。サイズは二号で、私達の手には少し大きかった。

「これでキャッチボールしようよ!」

「これで?」

「軽く投げるからさ」

雪乃がそのボールを右手で左右に振りながら言った。私達は、その小汚いソフトボールを使いキャッチボールをすることになった。最初はお互い十メートル程離れ、軽く下投げでのキャッチボールだった。

「ふりゃ!」

「ほい!」

変な掛け声を出し、ボールを投げ合う。その変な掛け声は、もしかするとお互いに少し、打ち解けた時なのかもしれない。

ここには私達二人しか居なくとも静かだ。ボールを素手で捕る音と、二人の変な掛け声だけしか聞こえない。

投げ合っている内に、次第に雪乃の球速が上がってくる。

「ちよっ、ちよっと!少し速いよ!」

「ははは!ごめんごめん!.....次はフライやってみようよ」

普通に投げ合うのが飽きたのか、私達はもう少し離れてフライを投げ合った。しかし、やはりフライでも雪乃の球は速くなる。自然と二人の距離が離れる。もうフライというよりは、遠投に近い状態である。そして何を思ったのか、雪乃は私の頭の上を遥か高く越える程の遠投をした。そして、私の十メートル程後ろの草むらに入った。

「痛つつつ!!!」

「!?!」

「!?!」

最近の植物は喋るのか?と馬鹿げたことを思いながらも、確かに草むらからは「痛つつつ!!!」という声が聞こえた。私は驚き、雪乃の顔を見ると「今、聞こえたよな?」という顔をしていた。

私達は恐る恐る草むらに近付いて行くと、草むらの中から葉っぱ

同士の擦れる音と共に、腰を擦りながら少女が出てきた。どうやら私達が投げていたボールが草むらの中に居た彼女の腰に直撃した様である。

「痛たたた………」

「あ！香苗！」

雪乃はこの少女を知っている様だった。

「あ……雪乃ちゃん？これ雪乃ちゃんのか？」

「う、うん……そうだけど……。もしかして……。当たった」

「うん……腰に直撃……」

「ご……ごめん」

「うん、まあ大丈夫だけどね。これ、返すね」

彼女は左手を差し出し、その中にはさっきまで私達が使っていたソフトボールが握り締められていた。

「ああ、ありがと。てか、何してたの？」

「草むらの中でツツジ見つけてね、蜜吸ってたの」

「おい、汚いぞ」

おいおい、その茶色く汚れた小汚いソフトボールで遊んでいた私達が言えないぞ。そう心の中で思いながら、私は彼女達の会話を聞いていた。

「ねえ、神代さんだよな？」

「え？うん、そうだけど」

「私同じクラスだよ。近田香苗だよ」

そう言われて思い出した。確かに彼女を私は教室で見たことがある。

近田香苗は髪が長く、おっとりした顔で一見大人しそうに見えるが、実際は平気で一人でツツジの蜜を吸う様な活発な少女だった。

「ああ、近田さんか。思い出したよ」

「香苗でいいよ」

「わかった……香苗……だね」

「じゃあ、私は七海ちゃんって呼ぶね」

「ちゃん」なんて呼ばれると少し照れくさいが悪い気はしなかったので、私はその呼び方に了承した。

「香苗もキャッチボールする？いいよね七海？」

「うん、私は全然いいよ」

「ほんとに！？じゃあ、入れて貰おうかな」

香苗はそう言うと、ついさつき腰にボールが直撃したにも関わらず、元気に投球フォームをした。

「あれ、香苗は左利きなの？」

「ほんとだ。王貞治と一緒にだな」

「雪乃ちゃん、ちよつと古いよ。工藤ぐらいにしときなよ」

小学生の女子とは思えない会話だが、私達三人は互いに打ち解けた。

そして、三人はキャッチボールの楽しさに時間を忘れ、気付いた頃には休み時間終了のチャイムが鳴り終わっていた。

「うわ！チャイム鳴っちゃったよ！」

「ちよつ！このボールどうするの！？」

「ロ、ロツカーの中に戻すよ！」

「急いで急いで！」

雪乃が乱暴にロツカーを開けると、開いた勢いと同時に中に入っていた掃除用具が盛大に倒れてきた。

「うわわわわわ！何だ！面倒くさいな！」

雪乃はそう言い、無造作に掃除用具を押し込んで、中のバケツにボールを入れて閉めた。

「さ！急がないとやばい！」

大急ぎで階段を駆け上ったが結局、私達が教室に着いた頃には既に担任が教室に着いていた。案の定、私達はこつ酷く説教をされた。席に着くと、雪乃、香苗と目が合い、お互いに俯きながらもクスクスと笑い合っていた。

小学校に入ってクラスに馴染めず、そんな毎日を通りし不安な気

持ちだったが、今日の出来事で一気に吹き飛んだ。

三時間目の後の休み時間も、私達三人で机を囲み話をした。素手でキャッチボールをしたからなのか、三人とも手が少し赤くなっていた。

下校も途中まで三人は同じ方向に向かう為、一緒に帰った。

雪乃は途中で木の枝を拾い、それを引きずりながら歩き、香苗はまたツツジを筆って蜜を吸いながら歩く。「もしかして、私はまだまともな人間じゃないのか？」と少し思い、それがまた面白く感じた。そして公園の前で別れ、それぞれの帰り道に着いた。

「今日は本当に楽しかった」と、雪乃、香苗に私は感謝した。

この日が私達三人が初めて出会った日である。

「あー、確かそんな感じだったなあ」と私は思い耽っていた。

「おいおい、どうしたんだよ？七海までポーとしちゃって」

「あ・・・いや、私も昔のこと思い出して。私達が初めて会った時のキャッチボールした時のことを思い出してたんだよ」

「ああ、香苗の腰に直撃したときな」

「あつたね、そんなの」

「そういや、あの日以来ずっと僕ら三人一緒に行動してたな」

「そうだね、木に登ったり、虫捕まえたり」

「色々したよね」。秘密基地も作ったよね！？」

「やった、やった！スーパーからダンボール貰って作ったやつだよね」

そういえば、そんなのも作った。

あれは小学校五年生ぐらいの時だっただろうか？最初に発案したのは雪乃であった。その頃になると、私達の中では雪乃がリーダー格で、私がまとめ役。香苗が場を和ませる役であった。

土曜日で午後の授業が休みの日、いきなり雪乃が「家帰ってからご飯食べて集合！秘密基地作ろう！」と言い出し、それに対して香

苗が「それ、いいね」という感じであり、私もそれに参加をするしか無かった。

私は家に帰り、大急ぎで昼食のハヤシライスを平らげ、集合場所の香苗の家に向かった。香苗の家は比較的大きな家で、香苗の部屋も広かった。立派な庭があり、池があったのも覚えている。

私に着くと、既に雪乃は到着していた。

三人が集まると、恐らく授業中に作ったのだろう、自由帳の中には完成図があった。

私達はその秘密基地を作る為に材料（主にダンボール）を調達した。調達した材料を近所の草むらに集め、三時間程で完成に至った。基地の中は三人では十分な広さで、床はレジャーシートを敷いた割と豪華なものだった。

それ以来、私達の拠点として活用された。

しかし、やがては梅雨の時期が来て、ダンボールにとっては天敵の雨が降り注いだ。結果的に基地は大きな被害を被ることになり終結を迎えた。

「最後は雨に濡れてグショグショになったな……。結構良い感じに出来たのに」

「……………」

「……………」

「……………」

三人の間に少し、時間が止まった。

「何か私達……あまり女らしいことしてないね……」

「そ……そうだな……」

「ま、まあ……昔のことだし、いいんじゃない……?」

少し悲しくなったが、それも良い思い出である。

昔話に盛り上がっていると、窓からオレンジ色の光が差し込むのに気付く、時計を見ると既に四時を過ぎていた。

「あ、もう結構な時間だね」

「ほんとだ、そろそろ御暇でしょうか?」

「うん、そうだね」

私達はコップに残ったコーラを流し込み、席を立った。「割り勘にしよう」と雪乃が言い出し、どう考えても私が損をするのが分かっていたが、久しぶりに三人で会話が出来たことが嬉しくて、私はそれを了承した。

店を出ると、西の方角には太陽が半分程沈み、空は一面オレンジ色に包まれて雲にもその色が映っている。

雪乃は家が遠く電車で帰るらしいので、私達は駅まで雪乃を送ることにした。店の中で言っていたことを雪乃は覚えていて、「ちよと寄り道してコロツケ買って行こうよ」と言い出し、駅に行くには何の道商店街を通らないといけないので、私達は帰り道にコロツケを買った。

商店街を抜けると、踏切の警報機の音が聞こえてきた。

「お、じゃあここでいいよ」

「うん、そいじゃまた明日ね」

「ばいばい」

私達がそう言うと、雪乃は財布から回数券を取り出し、改札を抜けてホームへの地下通路へと消えていった。

「さて、私達も帰るとしますか？」

香苗が言った。

「そうしますか」

私は香苗の口調を似せ、答えた。

それから私は香苗と一緒に帰ることにした。再び商店街を通り、来た道を話しながら歩いていった。

「でも、皆変わって無くて、安心したよ」

香苗が言い出した。

「そうかな？でも香苗は変わったよ。背も高くなったし、何か大人っぽくなったね。最初見た時全然分からなかった」

「んー、まあ、背は伸びたね。でも、中身はあんま変わってないと思うよ」

確かにそうである。外見は変わったが、香苗も、そして雪乃も久しぶりに会ったが、話をしても昔と変わらないと感じた。それには私も安心をした。何でだろう、そう考えていると少し泣きそうになってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あはは、七海い！何考え込んだ顔してるの。明日から新しい毎日が始まるんだよ！もっと明るい顔しないと！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうだね。元気にいかないかね！」

「そうだよ」

そうである、これからまた三人で過ごせるのである。

「それじゃ、七海。私こっちだから」

「あ、うん！また明日」

「ばいばい！」

香苗はそう言って、私と別れた。夕焼けの景色の中に香苗の後姿が見える。ふわふわと真直ぐな髪が揺れている。

考えてみれば、今日最初に話を掛けてくれたのも香苗である。

「香苗！」

「んー？どーしたの？」

「ありがとね！」

第二章

うるさい……。

うつらうつらの脳内に電子音が響き渡る。何かの曲の筈だが、今の私にはただの雑音にしか感じない。

電子音の先には目覚まし時計があり、時間は朝の七時二十分を指している。

「うあ……起きないと……」

うるさく鳴り響く目覚まし時計のアラームを止め布団から出ると、私は寝巻のまま部屋を出て、台所に向かった。

台所に着くと母親が洗濯をしていて、「おはよう」と挨拶をして洗濯物を抱えながら風呂場へと向かって行った。父親は既に仕事の為家を出ていた様である。台所にはラジオの音が流れ、それを聴きながらの朝食になる。

朝は色々忙しいので、我が家の朝はテレビよりラジオでの情報収集になる。

私は台所の周りを見回していると、冷蔵庫の上に乗っているカゴを見つけた。中には食パンが入っていて、これにマーガリンでも塗って食べようと思ったが、その隣にはメロンパンが入っていることに気付いた。パッケージには「高級メロンパン」と書いてある。

「お母さん……このパン食べていい？」

衣服を洗濯機に入れ終わった母親が台所に帰ってきたので聞いてみた。食パンの方が日付が古いらしく答えはNOだった。私は渋々食パンにマーガリンを塗り、席に着いて食べることにした。私は食パンは焼いてトーストにするより、そのまま食べる方が好きである。

昨日入学式を終え、今日から正式な登校になる。とは言っても午前中で終わるらしく、恐らくは集会などで日程が終了するのだと思う。

雪乃も香苗も同じクラスである。他にも見覚えのある生徒が居るかもしれないが、雪乃と香苗が同じクラスということが分かってい
るだけで、学校に行くことに對して安心が出来た。

私は朝食を終わらせると、食器を水に漬け「ごちそうさま」と母
親に伝え、寝巻から制服へ着替える為に部屋へ戻った。

着替えが終わり、ふと鏡に視線をやる。やはり何か恥ずかしい。
ブレザーということもあつてか、何処かのお嬢さんになった気分
である。

時計を見ると既に八時前である。学校指定のカバンを持ち部屋を
出て玄関に向かう。昨日初めて履いた革靴を下駄箱から出した。正
直、動き難い靴ではあるが、これもまた新鮮な感じである。

「そいじゃ、行ってきます」

玄関の扉を開け、私はそう言つて家を出た。

今日もいい天気である。天気予報によると降水確率は午前午後共
に0%ということらしい。太陽の光が眩しく、暖かいというよりは
少し暑いくらいだ。

カバンを肩に掛け、学校へと向かう。家から少し離れると、辺り
には畑と田んぼが所々に見られる。こうやって見ると、自然とい
物が目に優しいことが改めて感じられる景色であり、見ているだけ
で健康になりそうだ。

十分程歩いた頃には既に家という物は少なくなつていて、学校ま
で続く坂道が始まる。周りにも桜の木が生えていて、色鮮やかに花
弁が舞う。周りにもその桜を眺めながら歩く生徒が少しずつ現れて
きた。穏やかな坂道であり体への負担は殆ど無いのだが、慣れない
革靴ということもあり少し踵が痛くなつてきた。この桜で痛さを紛
らわせようと思つていると誰かが私の踵を踏み、沁みる様な痛さが
踵に奔つた。

「うっ、うめんー！」

一人ということにも関わらず、私は「痛っ！」という声を発しな
がら振り返ると、そこには申し訳なさそうな顔をした雪乃が居た。

どうやら私の踵を踏んだ犯人はこの雪乃の様だ。

「な・・・何すんのよ・・・」

「ごめん、歩いてたら七海見つけて驚かそうと思ってたら踏んじやつて・・・」

「ね！」じゃない。申し訳なさそうな顔をしていると思っいたら、急に微笑みながら人差し指を口元に当てウインクをする。柄にも無いことをしないで欲しい。

「革靴がまだ慣れないから踵痛いんだよ」

「ああ、確かにね。僕も踵が痛いよ。こんな靴じゃとてもじゃないけど走れない」

「流石に運動靴じゃないからね」

「んー、運動靴の方が良いな」

雪乃も踵を気遣いながら、爪先だけで歩いたり、足の側面で歩いたり、色々変えながら歩く。そんな雪乃を見ていると時が経つのも忘れ、気付いた頃には学校の門の前まで来た。

「おっ、やつと着いたか？」

雪乃も学校に着いたことに気付き、足元から学校の校舎へと視線を変えた。眺めた校舎をしばらく見つめた後、雪乃はニヤリと微笑み私の背中を軽く叩いた。

「よっしゃ、七海！行くぞー！」

「う、うん」

肩から少しずれていたカバンを掛け直し、門を通過して校庭に足を踏み入れる。今まで歩いていた硬いアスファルトから柔らかな土の地面に変わる。踵の痛みも少し和らいだ気がした。

「私達一年は三階みたいだね。一組の教室は東の校舎みたいだよ」カバンから入学式に貰った案内書を出し、雪乃に説明する。

時間は八時十五分を回っていた。そろそろ教室に行かないといけない。

私達は校舎の入り口を通り、教室に向かった。

校舎の中は木造の床であるが、古臭くも無く、新しいフローリングの洋でワックスも綺麗に掛けている。どちらかといえばお洒落な物で、落ち着いた雰囲気を感じられる。

長い廊下でもなく、教室が二つ程度でまた廊下が曲がり、一年の教室が全て同じ廊下に在る訳では無かった。少し雪乃と一緒に探していた。

「お、あそこじゃない？」

雪乃の指の先には「一年一組」と書かれたプレートが貼ってある。どうやら中央の校舎からは七組から順に並んでいて、一組は一番端に在る様だ。

私達は教室に入り、教室の中を見回した。教室も廊下と同じく、木で出来た床をしており、比較的広い物だった。天井には小さなクーラーと二台の扇風機が設置されており、真新しい蛍光灯が鮮やかに光っている。窓からは校庭も見え、三階ということもあり上ってきた坂と桜並木が見える。

机の上には番号が書かれた紙が置いてあり、自分の出席番号順に座る様だ。

私達は教室の奥へと進むと、十二番の机の上に見慣れた頭が俯いて寝ている。その姿は肌理が細かいイソギンチャクの様だった。

「お、香苗はもう来てたんだ」

イソギンチャクの正体である香苗の頭を雪乃がわっしと掴み上げ、頬を突く。

「おはよよ、香苗」

「ん・・・？あ・・・雪乃？おはよ・・・」

「これまた眠そうな顔して・・・」

「あ・・・七海も一緒だ・・・おはよ」

まだぼんやりとした顔で香苗が私に気付く。本当に熟睡していたのか、本人は目を開けたいが、しょぼしょぼして開けられないといった様子だ。

「どうしたどうした？寝不足かー？」

「んー？昨日は夜十時には寝たよ。七時に起きたから九時間くらい寝たかな」

「十分寝てんじゃないかよ」

昔からそうだが、香苗は本当にマイペースな性格だと改めて思った。昨日香苗が「皆変わって無くて、安心した」という言葉が分かる。

「もうすぐチャイム鳴っちゃうから、そろそろ目覚ました方がいいよ」

「あい・・・」

私の忠告に対し、うつらうつらしながら答え、顔を擦り目を覚まそうとする香苗を見ながら私達は自分達の席に着いた。席は縦に七列に並んでおり、私は前から六番目、雪乃は二つ前の四番目であり、香苗は隣の列の前から五番目で旨い具合に私達三人で三角形が出来た。今はまだ大丈夫だろうが、学校に慣れてくると授業に集中しないことになりそうだ。

八時半になりチャイムが鳴る。クラスは全員で四十一人で最初の登校日ということもあり欠席者は0であった。教室の中はチャイムが鳴ってからは、少し緊張した空気が流れている。

皆が教室の中で待っていると、廊下から足音が聞こえ、それが少しずつこちらに近付いてくるのが分かった。その足音が扉の前で止まり、扉に手を掛けゆっくりと開く。

教室内に入って来るのはまだ若い女性だった。髪は短く、背は百六十センチ前半ぐらいの整った顔立ちをした綺麗な女性だ。ただ一つ言えることとしては、少し眉毛が太い。だが、その太い眉毛からなのか、優しい感じがした。

その女性が優しく微笑みながら黒板の前へと進み、教卓の上へ手に持っていた本や書類、筆箱を置き止った。

「みなさん！ご入学おめでとございます！」という言葉がその女性がこの教室で初めて言った言葉である。続けて、自己紹介を始

めた。

彼女の名前は「進藤楓」といい、私達のクラスを受け持つ担任である。若い先生だが、落ち着いた口調で話し、また優しい話し方である。実は教師になって間も無く、初めてクラスを受け持つらしく本人も緊張しているらしい。

そんな風に話しが進められていくと、プリントが配り終わり、今度は生徒が自己紹介をすることになった。お約束の行事だが、これはウケを狙って変なことを言うと必ず場をしらけさせる。普通にするのが無難である。

自己紹介は出席番号の順に進められた。

一番目の生徒から順に進められ、次々と紹介が進み先生が「はい、よく出来ました」という表情をする。今のところ変なことと言う者は居なく、そのまま四番目の雪乃の番が来た。

ニヤリと微笑みながら席を立つ。

まさか、この子・・・何かする気では？

「はじめまして小野寺雪乃です。趣味はお菓子作りです！よろしくお願ひします！」

と、なんとも愛らしい表情で元気に言う。

絶対嘘だ。お菓子作り？焼き鳥焼くの間違いだろ？これは時折見せる雪乃の「乙女」という物らしく声のトーンも何時もより高い、本人曰く猫かぶりらしいが、どう考えても対象者を限定にしたネタにしか思えない。正直、雪乃は可愛らしい顔をしており、今の紹介を見ると傍からは「元気で可愛らしい女の子」に見えてしまう。

香苗の方を見ると顔を両手で押さえ小刻みに震えている。どうやらツボに入ったらしく、笑い声を抑えるのに必死の様だ。香苗がこちらに気付き「ちょっと・・・この子何かヤバイこと言ってるよ！」といった表情を私に向けた。

雪乃が満足げな顔をして席に着く。

次に私の前の生徒が自己紹介をした。辛島君という坊主頭で大人しい口調の男子だった。「こいつは多分野球部だな」と勝手に解釈

していると私の番が来てしまった。

私は正直に言うと、こういうのは苦手であり、緊張しやすい性格である。私は正直に、無難に答えることにした。気が付くと少し出が震えていた。

「はじめまして……。神代七海です。好きなテレビ番組はスポーツ中継です。これからよろしく願います」

席に座ると一気に緊張が解れ安心していると、香苗が「うん、良かったよ!」といった表情をしてくれて、雪乃は「おい、つまらんぞ」といった表情をした。

皆同じ様な紹介で進み、一列目全員の紹介が終わって二列目の生徒が紹介を始める。香苗の番もそろそろだが、当の本人は楽観的に自己紹介している生徒の方を見て微笑んでるだけだった。そして、出席番号十二番、香苗の番が来た。まあ香苗の事だ、上手くやってくれるだろう。そう思っていたのだが……。

「え……と……。ち、近田香苗ですっ!よ、よろしく願いますっ!」

それだけを言い、香苗は椅子をカタカタ鳴らしながら席に着いた。まさか……。緊張してたのか?雪乃の方を見ると腹部を押さえてビクビクと震えている。声こそ出していないが大爆笑の様である。香苗相変わらずニコニコしながら微笑み、自己紹介をしている生徒の方を眺めている。よく見ると香苗の笑顔はどこか引きつった物で、笑顔にしては硬直した表情だった。

この時間は割りと平和に進み、変なこと言う者も特に居ない。このクラスの生徒は皆、空気の読める人間が多い様で安心した。色々な意味で雪乃と香苗が一番やばかったと個人的には思う。

一番最後の生徒も紹介を無事に終え、担任が話を進めた。またプリントを配り、今度は大きなA3の用紙で中には今後の予定が書かれていた。担任がそれらの行事のことを簡単に説明をしてくれる。十分か十五分程でその話しも終わり、どうやら今日はこれで終わりの様だ。

まだ日直が決まってるないので、今日は出席番号の一番の生徒が号令を掛けることになった。「さようなら」という挨拶を全員で行い解散になると、雪乃と香苗がこちらに来た。

「香苗……天才だよ！面白すぎ」

雪乃がそう言い、香苗の肩を揉む。

「う……誰だつて緊張はするよ」

「それでも大袈裟だつて、もう可愛いなあ香苗は……」

「いや、あんたが異常だ」

「何？僕はいたつて普通に、正直に、自分を紹介したまでだよ」

「何がお菓子作りだ、焼き鳥の間違いだろ？」

「へ？そつち？それは本当だよ」

雪乃は真顔で答えた。そして、続けて香苗が言う。

「雪乃は料理上手だよ。私は雪乃の口調がツボだったけど……意外だった。雪乃が料理が得意だったなんて……。いや、意外というよりは何か悔しい、私は一切料理が出来ないからだ。」

「料理……頑張ろうかな……」そう思った、そんな昼過ぎだった。

「よし、何か食べて帰るか!？」

雪乃が元気な声を発しカバンを肩に掛けた。料理が得意というのは自分が食べる為に覚えたのじゃないのか？と思った。

「ねえ、一度学食行ってみない？」

香苗が提案をする。確かに今までは中学だったので学校での食事は持参をしていたが、これからは持参と学食が楽しめる。

「あー、私も行ってみたい」

私も香苗の意見に賛成した。私も一度食堂というものを行ってみたかったのである。「うどん」や「カレーライス」などの、持参では不可能な食べ物も校内の昼食で食べられるのはありがたい。

雪乃も賛成し、私達は食堂へ行くことが決まった。食堂は東の校舎とは反対の西の校舎に在る。とりあえず、まだ校舎の中は詳しく知らないの、私達は一旦一階に降りてから西の校舎に向かった。この西の校舎は商業科の校舎であり、制服のネクタイが私達とは違う色をした生徒が多く見られる。ここを歩いていると何か視線を感じてしまう。

「あ……いい匂いがする……」

食べ物の匂いが風に乗って流れてくるのに気付き、雪乃の表情が和む。香苗も同じ様な表情になり鼻を動かす。確かにこの匂いには空腹の時にはたまらないが、ここまで幸せそうな表情になるのか？と思わされる。

匂いがだんだん近付くと、「学生食堂はこちら」と書かれた矢印の付いた看板が見えた。食堂は一度校舎から出て、別の建物に在るようだ。私達は看板の矢印の方へ進み外へ出ると、レンガ造りの建物が見えた。思っていたよりは大きい。壁には飲み物の自販機とベンチが在り、そこで休憩も出来る様である。

「おお！結構広いな！」

「早速並びに行こうよ！」

雪乃と香苗はノリノリで中に入る。何人くらいだろう？三十人程が席に着いているが席は十分に空いている。受け渡し口の所にも十人程が並んでいるが大丈夫だろう。それくらい広い物だった。

「私席取つとくから、先に注文してきなよ」

私は三人分の向かい合える席を確保して座った。

「ほんと？ごめんね、早めに済ませるから」

「急いで行って来るよ」

そう言つて二人は列の最後尾に並びに行った。メニュー表を見ながら「なににする？」といった表情で会話をしているのがここから見える。二人がどんな物を選ぶのか、ちよつと気になった。私も今の間に何を注文するか考えておこうと思ひ、テーブルの上にあるメニュー表を見た。

「うどん」や「ラーメン」「どんぶり」に「定食」などが揃っている。私も少しお腹が減っていたので、定食を頼もうと思いい「豚のしょうが焼き定食」を頼もうと思った。価格も三百五十円と低価格で、学生の私達にはとても助かる内容だ。私は財布から三百五十円丁度を取り出し、二人が帰って来るのを待った。

十分程経つと香苗がお盆を持ちながら、こちらに帰ってきた。

「お待たせ、私取つとくから七海行つてきなよ」

お言葉に甘え私も並びに行く。席を経つ時に香苗のお盆を見ると「カレーライス」と「きつねうどん」が乗っていて、この細かい体によくこんだけ入るな、と思った。

私が並ぶ頃には列も短くなっていた。ここから調理場が見え、大きな炊飯器から炊かれた白米が白い湯気を上げている。上を見ると写真付のメニュー表があり、「豚のしょうが焼き定食」はどんな物が確認をした。

「豚しょうが……豚しょうが……豚しょうが……」

探していると、「ハンバーグ定食」の横にあることに気付いた。

内容は「豚しょうが焼き」と「中茶碗のご飯」、「味噌汁」に「漬物」と「サラダ」という物だった。基本的に定食は全部「豚しょうが焼き」の部分が変わるだけである。これで三百五十円は安い。

私の番が来る頃には既に雪乃は受け取りを済ませ、席に着いていた。

「すみません……豚しょうが定食」一つ

「あ、ごめんね！今丁度、無くなつてね、少し時間掛かるけどいい？」

と申し訳なさそうに言われた。二人が待っているので何か違う物を頼むことにした。こういう時に最初から食べるつもりの物が食べれない時は何か調子が狂う。

「じゃあ……えつと……ハンバーグ定食」は大丈夫ですか？」

「はい！『ハンバーグ定食』ね！」

後ろも並んでいたことなので私は急いでとつさに「ハンバーグ定食」を頼んだ。値段は四百円だったので私は五十円を財布から出し、四百円を渡して受け取り口で待った。

「はい！お待たせしました！『ハンバーグ定食』ね！」

ものの二分程待っていると出来上がった物を渡された。私はハンバーグにケチャップとウスターソースとマヨネーズをかけるという、とにかく有名どころの調味料を全てかけるといふ癖がある。私は

「う」

自由にお使いください」とかかれたそれらをかけ、ついでにサラダにもウスターソースをかけた。

「私も買った来たよ」

そう言っただけで席に戻る。お盆を置き、席に座るとあることに気付いた。

「あれ？まだ食べてなかったの？」

「そりゃ、初めて来たんだし、一緒にね」

「そうだよ、一緒に食べようよ！」

二人は私が来るまで食べるのを待っていてくれ、私の分のお茶も用意してくれていた。その何気ない気遣いを見た時、改めてこの二人と出会えて良かったと思ひ感動した。

「ありがとね、待っててくれたんだ」

私は二人に感謝をする。そして、もう一つあることに気付いた。予想通り雪乃のお盆には沢山の量が乗っている。

「雪乃は何頼んだの？」

「ん？『豚しょうが焼き』と『カツ丼』と『かけうどん』だよ
にこやかに雪乃が答える。

「お前か！！！」

「は？」

雪乃が何が？といった表情をする。確かに雪乃としては何のことだか分かるはずが無い。

「私も『しょうが焼き』頼もうと思っただけ。売り切れになってた

の

「ああ、そういうことか…….ちよつと食べなよ」
気を遣ってか、雪乃がそう言ってくれる。

「いや、ごめん、大丈夫大丈夫。雪乃が先に頼んだんだし」

「そう言つなよ。一口食べなつて!その代わりハンバーグ半分くれ!」

半分!? やなこつた。香苗はその会話を聞き、「あはは、半分つて!」と言い笑っている。

「まあ、半分つてのは冗談だけど、ちよつと一口ちようだいよ」
香苗がそう言ってくれるので、私は雪乃と皿を取り替え「しょうが焼き」を一口頂いた。豚肉は思っていたより柔らかく、タレもしつかりした味だった。少しウスターソースの味がしていて、多分雪乃が自分で混ぜたのだろう。そういえば香苗もカレーライスにウスターソースをかけていて、私達三人は食べ物にウスターソースをかけるという共通点がある様だ。

「ありがとう雪乃」

そう言つて私は皿を雪乃に返すと、雪乃も私に皿を返した。皿を見ると何か結構減っているが、まあ気にしないでおこつ。

「あー、食べた食べた!」

そう言い、満足そうな顔で雪乃がお腹を擦る。香苗も「ごちそうさま」と言い手を合わせていて、二人は食事を終わらせていた。私はというと、まだ少し食べ物が残っている。

「七海、まだ残ってるぞ! 食べてあげようか?」

「ご遠慮します」

この二人は私の倍近く食べている筈だが、何でそんなに早いんだ? 私が食べるのが遅いみたいに見える。私は既に少し胃袋がキツくなつてきて来ているというのに、二人は何やらアイスを今から食べるという会話をしている。昨日の焼き鳥屋でもそうだが、どん

な胃をしているのか見てみたい。

私は最後の一口を口の中に入れ、お茶を一口飲んだ。

「ごちそうさま」

手を合わせた後、私も食後の休憩に入る。

時間は昼の一時も過ぎ、食堂の中も窓から太陽の日差しが入り、ポカポカした陽気に包まれている。満腹になったこともあり、少し眠たくなりあくびが出た。

「ふああああ．．．．．何かここ、落ち着くね」

私が頬杖をつきながら言う。

「ほんと、食べ物もあるし最高だね」

「いうこと無しだね」

二人は外の自販機で買ったアイスを食べながら言う。二人の表情は実に幸せそうだ。そんな二人の表情を見ているとこっちまで幸せになりそうだった。

お腹も膨れ、のんびりと過ごす。幸せな時間。この時は時間がゆっくり、もしくは、時間が止まったようだった。

「んー．．．．．そろそろ帰る？」

香苗が言う。時計を見ると既に二時前だった。雪乃の方はこれまで気持ち良さそうに眠っている。沢山食べ、食べた後は眠る。まるで子供の様だが、その姿が妙に可愛らしかった。

「おーい、雪乃、帰るよ」

「ん．．．．．ん．．．．．むう？」

雪乃肩を揺さぶり声を掛けると、なんとも眠たそうな声を出す。あれだけ気持ち良さそうに寝ていただけに、起こすのは少し気の毒だった。

「ふあ．．．ああああああああ．．．．．」

雪乃が食堂内に響き渡る様な、大きなあくびをする。

「ほら、そろそろ帰るよ」

「ん．．．分かった、ちょっと待って．．．頭が冴えるまで．．．」

顔を擦りながら言う。そして、その体勢からピクリとも動かなくなつた。

「．．．動かないね」

「あら、動かないね」

「どーした？また寝たか？」

私がそう言うと、雪乃がその体勢のまま首を横に振る。そして、コップに手を伸ばしお茶を一口すすつた後、ゆっくり顔から手を離した。

「ふう．．．覚めてきたよ．．．」

目覚めが悪い方なのか、覚めてきたと言う割にはまだ顔は寝ている。

「今、何時？」

「もうそろそろ二時になるよ」

「え．．．？もう、そんな時間？．．．お腹いっぱいになつたら眠くなるね」

雪乃はそう言いながら大きく伸びをする。

「じゃあ、帰ろうかね」

私達は机の上にあつたコップを持ち、カバンを肩に掛けて席を立ち、コップを返却口に返しに行った。周りを見渡すと、既に生徒の数は少なくなつていて私達の他に二人しか居なかつた。先程まで賑やかだつた食堂内も今では静かになっている。コップを返却口に置き「ごちそうさま」と挨拶をした後、食堂を後にする。

来た道を通り、中央校舎に着いた。

この学校は外でも校舎内でも同じ革靴を履き、上靴という物が存在しない。その様な理由で、下駄箱という物も存在しなく、普通なら中央校舎の入り口には下駄箱がある筈だが、この学校には無いのでやけに入り口は広く感じる。

校舎を出て、校庭を見ると既に人気が無い。人が居ない学校はとも静かで、何故か寂しい。数ヶ月するとこの校庭も下校時には部活などで賑やかになっているのだろう。

校門を抜け、坂道を下り終わると雪乃が言った。

「じゃあ、僕こつちだから」

「あれ？ 駅まで送っていくよ」

「あー、いいいいいよー。いくつだと思ってんだよ！ 一人で帰れるよー！」

そう言つて雪乃は「じゃあね！」と言い、帰つて行つた。遠慮して、というよりは何か一緒に来られては困る。といった感じだった。

「なんだろ？ 雪乃何か変だったよ」

私がそう言つたと、香苗がニヤリと今までに無い笑顔をした。

「雪乃も女の子だよ、色々あるんじゃない？ ……」
追いかけてみようか？」

雪乃にそんな浮いた話しなど、いまいち想像出来ない。でも、ちよつと気になつたので私は香苗の意見に賛成した。

まだ雪乃の姿は見える。私達は雪乃に見つからない様に着いていた。雪乃の足は少し急いでいて、見失わない様に気を付けなさいといけなかった。

商店街を通り、もうすぐ駅が近づく。電車のダイヤに合わせる為に急いでいただけじゃないのか？ と思つていたが、その時、雪乃は駅とは反対側に曲がった。

「ほら！ やっぱり何かあるんだよ！」

香苗が私だけに聞こえるような小さな声で言う。小さい声だが、その声はとても興奮した感じの声だった。おいおい、と思つたが内心私もドキドキしていた。

雪乃の足もだんだん速くなり、私達は追いかけるのに苦労していた。

「……あれ？」

細い道を通り抜け、少し広い場所に出ると雪乃を見失つてしまつ

た。

「見失っちゃったね・・・」

私はそう言い香苗の方を見ると、香苗の異変に気付いた。香苗は小刻みに震え、目が涙で潤んでいて焦点が合っていない。

「ちよつと！香苗！どうしたんだよ！」

「え？あ・・・え・・・？」

私が香苗の背中を擦り問いかけると、香苗の表情がハツとなり我に返る。涙が流れていたことに今まで気付いていなかった様で、目を触った時に気付いた様だ。体はまだ少し震えている。

「うっ・・・」

香苗は体を丸め、その場にしゃがみ込み、私はその背中を擦ってやった。背中から小刻みに震えが手に伝わってくる。

「香苗・・・大丈夫？・・・」

「ごめん・・・ごめんね・・・何か今、凄く怖くなって・・・」

「香苗・・・」

背中を擦ってやってるうちに、香苗は少し落ち着いた様だ。

もう既に雪乃を追っていたことは私達の頭には完全に無く、今はこの現状でいっぱいだった。

「今日はもう、帰る」

「・・・うん」

私は香苗が完全に落ち着くまで待ち、それから帰ることにした。あれだけ元気な香苗が今はこんなに元気が無い。このまま香苗を一人で帰すなんてとても出来ないので、私は香苗を家まで送っていくことにした。

第三章

今日から授業が始まる。今日の授業は五時間目までであり、カバンの中は今までと違って重い。今日は弁当を持参した。

坂道を登り学校に着き、東校舎に向かう。廊下を歩いていると今日は上級生も多く見られた。少し歩くと一組の教室に着き、中に入ると既に雪乃と香苗は来ていて、二人で会話をしている。

「おはよ」

「お！おはよーさん！」

「あ、おはよう」

昨日のこともあって、香苗のことが心配だったが、元気そうではよりだ。私が席に着くと香苗が「昨日はごめんね・・・」といった表情を私に向けた。私も「いいよいいよ」という表情で返す。お互い気にはしていた様だ。

昨日、雪乃が駅にまっすぐ帰らなく、何処かに寄り道をしていたのは確かで気にはなるが、とてもそんなことは聞けない。私達は昨日、雪乃を追ったことは忘れることにした。

チャイムが鳴り、担任が教室に入る。そして朝のホームルームが始まる。ホームルームの時間は八時半から八時四十五分までの十五分間であり、その後八時五十分から授業が開始される。今日のホームルームでの話の内容は、「今日から授業が始まります。とりあえず緊張しないで楽しくやって行きましょう」といったものだった。

ホームルームも終わり、授業まで五分間ある。今日の一時間目は国語であり、机の上に教材とノート、筆記用具を用意して待つ。初めて使う教材は、まだ折り目も無くページは真っ直ぐで、指で軽く擦ると切れそうだ。

そんなことを考えながら教科書を眺めているとチャイムが鳴り、

二分程後にドアが開いて国語の教師が入ってきた。国語教師はスーツ姿の四十代くらいの大人しそうな男性だ。国語は嫌いな教科では無く、むしろ好きな方だ。逆に数学は苦手で、私はどちらかという文系の人間である。

授業が始まり教科書を開く。文を読みそれについての無いようだ。最初の数行を先生が読み、その後数人の生徒で読み上げる。言葉などは難しくなったかもしれないが、基本的には中学の頃と似た様な進め方である。初めての授業ということもあって皆真面目に受けていて、寝る者は一人も居ない。雪乃と香苗も昔から授業の時は真面目であり、二人とも成績が良かったことを覚えている。私は国語、社会などは良かったが、数学、理科は成績が悪かった。いわゆる文系なのかも知れない。

授業も進み、既に九時半を過ぎた頃に先生が「じゃあ、そろそろ時間も来るし宿題の場所を言います」と言い出した。おいおい、最初からいきなり宿題なんて出すなよ。と思ったが、これが何やら高校生になったなと改めて実感した。宿題の内容は、教科書の下に書かれた漢字七種類をノートに五回書き写すという物で、難しい物では無くて安心した。

九時四十分になりチャイムが鳴る。全員席を立ち、挨拶をして一時間目が終わった。

私は一度席に座り机の上を片付けることにした。休み時間に入り、教室の中は賑やかになる。丁度机の上を片付け終わった頃に雪乃が私の前に来た。

「あー、やっと終わったね」

伸びをして雪乃が言う。まだ雪乃だけしか来ていなく、私は香苗の方へ視線をやると、香苗の席の前に男子が二人立っていて、香苗はまだ座ったままだ。

「うふふ、香苗さんは人気があるようですねえ」

ニヤニヤした表情で耳元で雪乃が呟く。当の香苗はあたふたしていて困っている様子だ。確かに香苗は顔立ちが整っており、スタイ

ルも良く性格も穏やかな、いわゆる完璧な人材だ。考えてみると、その容姿から、昔香苗は私達と一緒に秘密基地を作ったり、花の蜜を吸ったりと活発な遊びをしていたなんてピンと来ない。そんな香苗がこちらを向き私達の方を指差した後、こちらに来た。恐らく、「私、あの子達に用があるから・・・」とでも言ったのだろう。

「ふう・・・」

「香苗さんはモテますねえ」

「ちよ！やめてよ、雪乃お〜」

「ひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

嫌がる香苗をからかって雪乃がオツサンの様にして笑う。

「まあ、飴ちゃんあげるから機嫌直してよ」

と言い、雪乃はポケットからのど飴を取り出し香苗に渡す。今度は一気にオバハン臭くなった。香苗はふくれた顔をしながらも、しっかりと飴を受け取る。それからは三人でいつもと同じ他愛ない会話を楽しんだ。

しばらく話しているとチャイムが鳴り、私達はそれぞれの席に着き授業を受ける。そして、授業が終わるとまた集まり会話を始める。四時間目の授業が終わり昼休みに入るまで、その繰り返しだった。

「あー！お腹すいたよー！」

雪乃が香苗の手を引っ張ってこちらに来た。

「七海はご飯どうなってるの？」

「あ、私はお弁当だよ」

私はそう言っただけでカバンから弁当箱を取り出した。

「二人はお弁当持って来て無いの？」

「ううん、私達もお弁当だよ」

「いやー、学食は安くて良いけど、数食べたならなんだかんだで昨日も千円以上使っちゃったからね」

そりゃ定食にうどんとカツ丼を食べたら、いくら安くても金額は張る。それから私達は机を二つ繋げてから三人で昼食を楽しむことにした。

私の弁当箱は二段重ねの小さな物で、米とおかずは上下で分けてある。香苗の物はいたって普通の弁当箱で中身は可愛らしくタコウインナーや鶉卵のフライが入ってあるが、別に果物がどっさり入ったタツパを持って来ている。さて、最後に雪乃だが、雪野の弁当箱は意外と普通ではあったが、それを二つ持ってきていた。中身は魚のフライや海老の天ぷら、から揚げに卵焼きなどが一つの弁当箱に詰め込まれ、もう一つの弁当箱にはご飯だけが詰め込まれ上に胡麻塩が降ってある。

「うわ、豪勢だなあ」

「ふふふ、これ僕が作ったんだよ！」

「え？マジで!？」

「昨日言ってたでしょ、料理得意だって」

そう言えば、昨日の自己紹介の後と言っていたのを思い出した。ネタだとは思っていたが、香苗もそうだと聞いていたので私は半信半疑で信じたが、まさかこうして証明して来るとは。雪乃が「食べてみる」と言うので食べてみたが、味は確かに美味しく、卵焼きも出汁がしっかりとっていた。

「うん、確かに美味しいよ。本当に料理得意だったんだね」

「だろ？」

雪乃が得意げに言う。

「でも……」

「でも？」

「野菜があまり無いね……」

「……それは認める」

午後からの授業は英語で、今日の授業はこの五時間目で終わりである。

英語……。まさか外人の教師じゃないのか？と恐れていたが、実際は私の予想を裏切る結果だった。バリバリの日本人だ。

先ほど国語・社会が得意で、数学・理科が苦手と言ったが、この英語も実は苦手だ。私は文系では無く、雑学が得意なだけなのだろうか。

英語教師は教卓にラジカセを置いて授業を進めた。ラジカセからはネイティブな発音の英会話が流れる。

「全く何言ってるかわからん・・・」

ラジカセの会話が一通り終わると、今度は生徒達が文章を読む。といったありがちな内容で授業が進み、気が付いた頃には授業が終わってしまった。

授業が終わって数分経つと、担任教師が教室に来た。帰りのホームルームの様である。ホームルームもこれといって変わったことはなく、十分程で終了した。

午後の授業もホームルームも終わり、私達は帰る準備をした。今日から放課後の掃除があるらしく、掃除当番は出席番号順に決まり、今日の当番に私と雪乃が当たった。香苗は明日になったが香苗は私達二人を待つついでに掃除を手伝ってくれた。

まだ、入って間もない教室ということもあって、そんなには汚れておらず早く終わりそうだ。ある程度ホコリが集まると、雪乃が用具入れのロッカーから塵取りを探している。雪乃と用具入れのロッカーを見ると妙に懐かしい気分になった。

雪乃が塵取りを見つけ出し、私達がホコリを塵取りに向けて掃き入れる。そのホコリを込み箱に流し込み、掃除は終わり、残るはゴミ箱の中のゴミを外の焼却炉に捨てに行くだけだ。

「捨てに行くの僕らがやつとくから、皆帰って大丈夫だよ」

雪乃がそう言うと、他の生徒達が「そんなの悪いよ」と遠慮がちに言う。それでも雪乃は「いいって、いいって」と言いながら私達二人に対して「別にいいよね？」と顔で合図し、私達はその表情に對して「大丈夫だよ」と返す。そうすると他の生徒達は「じゃあ、お言葉に甘えて」「ありがとね」「近田さんも手伝ってくれてありがとつ」と言い帰宅をした。

「それじゃ、僕は「捨てに行く」としますか？」

「はいよ」

私達はゴミ箱を持って教室を出た。放課後になり、廊下にはもう人の数があまり見られなくなっている。太陽の位置は少し低くなつて来ていて、窓の外を見ると眩しい。少しお腹も減ってきた頃だ。

「焼却炉つてどのへんにあるの？」

私が二人に聞いた。そういえば焼却炉の位置なんて知らない。

「あ、私も知らないよ・・・」

「焼却炉なら体育館の裏だよ。焼却炉つて言っても今はもう使つて無いみたいで、ゴミを回収するプールみたいなのがあつて、そこに捨てといたら良いみたい」

「へえ、良く知つてね」

「そりゃ、知らないで捨ててくるなんて言えないよ」

いや、あんたなら言いそつだ。知らなくてもやつてみれば大丈夫、の様な性格が雪乃にはある。そんなことを思っているうちに、体育館の前まで来ていた。私達は裏に回り、そのプールとやらにゴミを流し込む。中にはゴミの中に消しゴムの破片や、割れた定規などが混じつていて、いかにも学校で出たゴミといった感じだ。

雪乃がゴミ箱の中身を全て捨て終わると「さて、戻るか！」と言う。私と香苗は雪乃の後に続き、教室に戻ることにした。

校舎に入り階段を上がつて、廊下に入る。廊下には先程よりも人の数が少なくなつていて、数える程しか居ない。もう空はオレンジ色になつていて、太陽も更に低くなつていた。教室に着くと、雪乃がゴミ箱を元の位置に戻す。

「じゃあ、帰ろつか？香苗もありがとね」

「ごめんね香苗、遅くまで手伝つて貰つちゃつて」

「んーん、いいよ」

教室には誰も居なく、最後に残つたのは私達三人だけなので鍵を閉めて帰ることになった。三人で廊下に出て鍵を閉め、その鍵を職員室へ返しに行く。職員室には数人先生が残つており、「さような

ら」と告げ、私達は学校を後にした。

既に時間は四時半を過ぎており、夕焼けが眩しい。今は四月ということもあり、この前までに比べれば、日が高くなっている。

三人で話しながらの下校。時期的に坂の周りにある桜の花もそろそろ終わりを告げるだろう。そんな桜を見ながらの下校。話していると時間が経つのも早いもので、気が付けば坂の麓に着いていた。

昨日は雪乃とはここで別れ、私と香苗の二人は雪乃に気付かれない様に後をつけた。

雪乃は商店街を抜けた後、本来行く筈の駅とは反対側の道に進み、私達はその後を追いかけたが見失う。……。その時に香苗が震えだし泣いてしまった。香苗自身も自分に何が起きたか分かっていない。

「じゃあ、僕こつちだから、じゃあね！」

昨日と同じ様に雪乃が言う。私達はそれに対し、手を振って応えた。

昨日のこともあり、私達は今日は付いていかずそのまま別れた。

香苗も昨日のことを思い出していたのか、笑顔で雪のを見送っているが何処か表情が暗い。心配だったが香苗は触れて欲しくないだろうと思ひ、私はそれについて何も言わなかった。その後も香苗と途中まで一緒に帰ったが、話の内容は今までと変わらない他愛無い会話をした。

「それじゃ、香苗また明日ね」

「うん、ばいばい！」

私達はそう別れの挨拶をし、それぞれの家に帰った。

最初の授業ともあり内容的には優しい物だったが、やはり最初っというものは何処か堅苦しく神経を使う物である。

「あー・・・疲れた・・・」

帰って来るなり私は一階の居間で仰向けに寝転がった。時間は既

に五時を回っており、夕飯の準備を母親が居間と台所を
行き来している。

「あんた、そんな所で・・・邪魔だよ」

そう言つて母親が私のお腹の上に、今日の夕飯で使うと思われる
玉葱を乗せる。私はその体制のまま手の中で玉葱を転がした。転が
しすぎたのか玉葱の皮が細かく私の顔の上に振つてきた。

「ぶつ・・・お母さんこれ返すよ」

私は立ち上がり、台所に居る母親の元へ向かつて玉葱を返した後
自分の部屋へ戻つた。

自室のドアを開け部屋に入るとカバンを置き、ベッドへは向かわ
ず、そのまま床へ仰向けに寝転んだ。天井をしばらく眺めながら色
々と考える。「晩御飯何時かな?」「着替えようかな?」「そんなど
うでもいいことを考える。このまま夕飯までこうしているのも良い
が、それは勿体無いとも思ひ体を持ち上げ、とりあえず勉強机の椅
子に着いた。

「んー・・・」

しかし座つたからといってもすることは無く、私は机の上の物を
触つたり、引き出しの中を探つたりするしか無かつた。引き出しの
中には、小学校の頃に買った物も多く入つていて、何か懐かしい気
持ちになる。色鉛筆は二十四色の内やけに赤や青が短くなつていて、
今ではシャープペンシルを主に使っているので新品の鉛筆が箱に入
つたままの状態に残っている。奥の方を更に探してみると、トラン
プやスーパーボール、線香にビー玉など謎な物が出てきて、それと
なく面白く時間が潰れた。

何でこんな物買ったのか馬鹿馬鹿しい物が沢山発掘され、それを
眺める。でも、当時はそれらがとても欲しくて、大切だったのだろ
う。こういう物が捨てるに捨てられない物なのだろう。

時間が過ぎ、父親も仕事から帰つて来る時間になると、外は既に
暗くなつていて時間は七時になっていた。下の部屋から「七海、ご
飯よー」と言う母親の声が聞こえ「はい」と言い返し、私は机の

引き出しを閉めた後、自室を出て下の部屋へ向かった。

居間へ行くとテーブルの上には夕飯が並べられ、私服に着替えた父親が座っていた。

夕飯のメニューは「野菜炒め」に「ポテトサラダ」「アサリの味噌汁」だった。私の顔めがけて皮を降らした玉葱は、恐らくこの野菜炒めの犠牲になったのだろう。

私は食事と玉葱に感謝の意を込めて手を合わせ、食事を始めた。テレビを見ながらの食事。テレビのブラウン管にはプロ野球の開幕直前の特集が映されている。私が好きな選手のインタビューが始まり、箸と茶碗を持ったまま静止してしまい、母親に注意されてしまった。

「ほら、テレビばかり見ない。こぼれるよ」

「あ、ごめん・・・」

そんな雰囲気ですいつもの食事の時間が進んだ。

「ごちそうさまあ」

私は手を合わせし食事を終え、食べた後の食器を台所へ持って行った後、もう一度居間に戻ってテレビを見た。私の部屋は今のところテレビが無く、この部屋で見るしかない。映っているチャンネルはこの地域のローカル放送で地元タレントが各地に行き、旅をするという番組だ。これといった派手な物では無く、同じ流れが一時間続くまったりとした番組だ。この地域では有名な番組らしく、四年程続いているらしい。番組の本が出版されていることには驚かされた。

のんびり居間で過ごしていると、廊下から電子音が聞こえた。どうやら風呂が沸いた様である。私が「誰が先に入る？」と親に尋ねると、「あんたまだ制服だから先に入って、着替えなさい」と母親に言われる。忘れていたが、私はまだ制服だった。母親に言われたとおりに、最初に入らせて貰うことにした。

風呂という場所は家の中で最も落ち着く場所なのかも知れない。疲れが取れて、明日も頑張れそうな気持ちになれる。風呂に入り、

四十分程経ち、湯船に浸かっているとだんだん眠くなってきた。このままだとのぼせてしまおうと思い、湯船から出てシャワーを浴びた後に風呂場から出ることにした。

風呂に入り寝巻にもなった後、私は風呂が空いたことを親に告げ、洗面所で葉を磨いた後、自室に戻った。部屋にはテレビが無いので、私は布団に入り雑誌を読んだ。ファッション誌や情報誌ではなく料理の本を。雪乃や香苗は料理が出来るが、私は出来ない。これは悔しいというより情けなかった。今年の目標は何か一つでも一品出来る様になることである。

買った雑誌は、テレビでも良く放送されている番組のテキストだ。カラーページで写真が多く載っている。

「おお！」

読んでいるだけだが、何やら作った気分になっていた。

本を読んで関心していると、気が付けば既に十二時を過ぎていた。明日も学校があるので、そろそろ寝ることにしよう、そう思い電気を消した。

明日は第一土曜日なので授業は午前中で終わる。気分も楽だ。明日の時間割は国語・社会・美術・美術の四時間だ。

「……………国語……………」

国語のことで頭に過ぎる。

「あ……………宿題が」

私は今日出された国語の宿題のことを思い出し、布団から飛び出して机に向かい宿題をする。布団に入ることが出来たのは、深夜の一時半だった。

疲れた私は眠るまでに、あまり時間は掛からなかった。

この日の夜、私は夢を見た。夢の内容はあまり覚えていないが何やら懐かしく、綺麗な夢。そして、何故か少し悲しかった様な気がする。

ここは何処だ？ 見覚えはあるが思い出せない。

体が小さい。いくつくらいだろう、これは小学生くらいか？

そして、周りに視界を向けると気が付いた。私その他にもう一人いる。いや、二人だ。

雪乃？ 香苗？

わからない。誰だかわからないが、私その他に誰か二人が居る。同じくらいの年齢だ。私はその二人と一緒に遊んでいた。

何をして遊んでいただろう。とにかく走り回っていた。走って走って、草むらに転がる。そんなことの繰り返しだった。

どれくらい遊んだのかは分からないが、そろそろ私達は帰るらしい。

帰り際に一人が私ともう一人に何かを手渡した。その後お互いに手を振り分かれる。

私が覚えているのはそこまでだった。

第四章

鳥のさえずりと共に目が覚め、時計は朝の七時前を指している。どうやら目覚ましのアラームより早く起きた様だ。

昨晚は眠るのが遅かったが、疲れによってぐっすり眠れたので頭はいつもより冴えている。今から二度寝する程の時間も無いので、私はそのまま制服に着替えた。

今日は土曜日で授業は午前中に終わり、明日は日曜日で休みという、とても気持ち的に楽な日だ。

着替えも終わり、いつもの様に階段を下りて顔を洗った後に台所へ向かう。台所には母親が既に居て、ラジオを聞きながら朝食を楽しんでいた。父親は週休二日なので今日は休みでまだ寝ている様である。

「あら、今日は早いのね？」

「うん、早く目が覚めてね」

私はそう言いながら食パンを袋から取り出し皿の上に乗せ、マーガリンと牛乳を冷蔵庫から出して自分の朝食の準備を始めた。時間は十分あるのでゆっくりと食事が出来る。たまにはこんな日も良いなと思った。

朝食を食べ、少しくつろいでから今日は少し早く学校に行こうと思いいつもより十五分程早く家を出ることにした。

革靴にもだいぶ慣れてきた。足取りが軽い。いつも通る畑や田んぼの風景も見慣れてきた。見慣れたというよりは馴染んだのかも知れない。風に乗って土や青臭い匂いが流れてくるのもこれはこれで良い物だ。

だんだん学校に近付いて来ると坂道が見えてきた。

「ん？」

私は坂道の麓にある物、いや、ある者を見つけた。そこには坂の頂上を見上げながら立ち止まっている雪乃が居た。そして私はこの間のことを思い出した。そろそろ私の後ろを付け、驚かそうとしたらしいが、その時に私の踵を踏んだことを。

私は見付からない様にゆっくりと雪乃に近づく。どうしてやろう。同じ様に踵を踏むか、それともスリパーでも掛けてやるか、色々考えながら近付き、雪乃との距離が二メートル程になった。「よし、スリパーで決まりだ！」そう思い最後の一步を踏み出した。その時だった。

「痛つつつつつ！！！！！！！！」

「あ……………」

雪乃が視界から消えた。私は恐る恐る視線を下に送ると、そこには踵を押さえて蹲る雪乃の姿があった。雪乃はこちらを向いて目に涙を浮かばせながら私を睨みつけた。

「七海！？何！？わざと！？仕返し！？」

「ご、ごめん！わざとじゃない！わざとじゃないよ！」

確かにわざとじゃない。私は嘘はついていない。

「じゃあ、何で踵踏むんだよ」

少し冷静さを取り戻した雪乃が立ち上がり私に言う。

「いや…………ね、後ろからそーと近付いて…………」

「近付いて？」

「スリパーをしよう……………」

「何故そんなことをしよう？」

雪乃の表情が笑顔になる。恐怖としか例えられない笑顔だ。

「この前…………踵踏まれた仕返しを……………」

「やっぱり仕返しじゃないかっ！！！！」

雪乃はそう叫び、私の顔を掴んで握りしめた。女とは思えない力だ。

「痛い痛い痛い！！！！雪乃！本気で痛いよ！！！！！！！！」

「謝るか…………？」

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

私が誤ると雪乃の手から力が抜け、私の顔から手を離れた。あまりの痛さにその顔を今度は私が抑える。

「痛たたたたた………」

「まったく、何がスリーパーだ」

雪乃が仁王立ちをして言う。仕返しするつもりが返り討ちにあってしまった。

「坂の上を見てブーツとしてたから、やってやろうと思って……」

「ん……？ああ、桜を見てたんだよ」

「桜？」

桜と聞いて私も坂の方向に顔を向ける。桜の花弁が散り、風に乗って宙を舞っている。地面にも多くの花弁が落ちている。今が丁度ピークの様で来週にはこの景色も見れないだろう。

「もう見納めだよ。七海も今の間に見ときなよ」

「うん」

しばらくの間、私は雪乃と一緒に桜を眺めた。今の間にこの桜を目に焼き付けておこう、そう思いながら。

「さあ、そろそろ行くのか？上りながらも桜は見れるし」

「そうだね、なんだかんだでいい時間になって来たし」

そして私は雪乃と話をしながら坂を上った。

「そういや、今日は午前中で終わるよ」

「おお、そうだな！気楽だよ」

雪乃がにこやかな表情をして言う。

「七海は昼ご飯はどうするの？」

「んー、別にどうと決まっては無いよ」

「じゃあ、食堂寄って帰ろうよ。香苗も誘って」

「うん、いいよ」

そんな会話をしながら坂を上る。今日はいつもより早めの登校だ

が、周りには多くの生徒が私達と同じ様に坂を上っている。だいぶ暖かくなって来たので上着を着るのには少し暑いので、上着をカーディガンに替えている生徒が多い。私も雪乃も今日はカーディガンを着ている。

坂を上りきり、学校の前まで来るとボードを持った上級生が何人が居た。数日後から始まるクラブ活動の入部に向けての宣伝をしている様だ。

「ふくん、クラブかぁ・・・、七海はソフトボール部とか入ったら？」

「勘弁してよ、昔の遊びじゃ無いんだから。雪乃の方こそ向いてるんじゃない？」

「無理無理、香苗の腰にぶつけちゃうよ」

「また懐かしいことを引っ張り出して来て・・・」

「へへへ」

これだけの広い校庭があるので、運動部は豊富な練習量を得ることが出来そうだ。昔のキャッチボールなどの懐かしい思い出を話しながら校舎に入る。

「そういや雪乃はいつもこの時間に来てるの？」

「いんや、いつもはもうチヨイゆつくりだよ。今日は早く目が覚めてね。早めに登校したら桜が気になって、それで見ってたんだよ」

「それで私が踵を踏んじやった訳ですね・・・」

「・・・その通りです・・・」

「・・・」

「七海も今日は早いじゃん？」

「うん、私も今日はちよつと早く目が覚めて」

「ふーん、そうなんだ。香苗はもう来てるのかな？」

「あの子は割りとキツチリしてるから来てるんじゃない？」

私がそう言った頃には丁度、一組の教室の前に着いた。この教室も今では見慣れたものである。そんな見慣れた教室に入り香苗の机を見ると、そこには以前に見たイソギンチャクが参上していた。

「ほら、イソギンチャクだよ」

「うん、イソギンチャクはキツチリしてるね」

雪乃はそう言っただけでイソギンチャクを持ち上げる。

「キスしてやるうか」

「この子の将来に関わるからやめときな」

そんなことを言っているとき香苗が「ん？」と呟きながら、目を覚ましたようだ。

「おはよう、イソギンチャクさん」

「おはよ……ん？イゲソンチャク？」

何かまだ寝ぼけている様子だ。そっとしておこうと思い、ゆっくりと頭を元に戻すと香苗はうつらうつらとしながら頬杖をついたまま目をしょぼしょぼさせ、無言のままじっとしていた。

「七海さん？キツチリしてますか？」

「すみません、してないです」

私達はお互い顔を見合わせた後「ふう……」とわざとらしく小さな溜息をしてから自分の席に着いた。とりあえず一時間目の国語の用意をする。ちゃんと昨日に宿題もしてきた。私が用意を済ました頃に雪乃がこちらに来る。

「香苗？宿題はちゃんとやってきた？」

「うん、やってきたよ」

「うわ、つまんね！写さして昼ごはん奢って貰おうと思ったのに……」

なんて奴だ、私から写さしてくれと言ったならまだしも自分から来るなんて。

「残念でした。てか、写さすも何も教科書の下に漢字書くだけだからみせて貰わなくても大丈夫だよ」

「へ？漢字？」

「？」

「何言ってるの？数学の宿題のことだよ……」

「へ……、数学？」

「国語のなんか教科書写せば大丈夫だろ」

そんなんあつたつけ……。そういえば何か教科書三ページ分程出てた様な……。

「その顔……. やってないな！」

「やってないです……。かけうどんで良い？」

「お揚げさんが入ったのがいいなあ……。」

「きつねうどん……。わかりました」

そう言うとき雪乃は「ははははは！」と笑い勝ち誇った様な顔で数学のノートを差し出す。

「ここから……。ここまで！」

「うわ、結構多いなあ……。」

雪乃のノートを開くと二ページに亘り数学の問題が書き記されていた。さっきは「なんて奴だ」なんて思ったが、今は少し教えてくれた雪乃に感謝をしている。正直、二時間目の数学までに一人で出来るとは思えない。

「それじゃ、きつねうどんよろしく」

雪乃はそう言うとき、手をひらひらさせながら自分の席へ戻って行った。

時計を見るとホームルームが始まるまで十五分程まだ残っている。今日は早めに登校したのが不幸中の幸いだった。これだけ時間が残っていれば丁寧に写すことも可能である。そう思いながら雪乃のノートを見ながら写した。雪乃はあんな性格だが、ノートの中身は綺麗にまとめられ、字も丁寧に綺麗である。とても見やすいノートだった。それは小学性の頃からノートは丁寧に書かれていて、字が綺麗だったのを覚えている。

着々とノートを写し、最後の問題を書き終えた頃には、時間はホームルームまで二分程になっていた。とりあえず書き終えたので私は雪乃にノートを返しに行く。

「雪乃、これ、ありがとね。助かったよ」

「いやいや、どういたしまして。間に合って良かったね」

「うん。それと相変わらず、字綺麗だね」

「お！ありがとうね。まあ、乙女ですからね！」
もうこれは持ちネタなのか？

四時間目が終わり、ホームルームも終わった。二時間目の数学の宿題も雪乃のおかげで無事に済み、平和に過ごすことが出来た。

「それじゃ、香苗の掃除手伝いしましょうか」

「そうだな」

「ごめんね、わざわざ手伝って貰っちゃって」

今日は香苗が掃除当番である。昨日は私と雪乃が掃除当番だったのを香苗が手伝ってくれたので、今日は私達が香苗の掃除を手伝うことにした。まあ、何より香苗を残して帰る様なことはしないが。

「ありがと。二人増えたら助かるよ」

月島さんが言う。月島さんは香苗の後ろの席の生徒だ。続いて他の生徒達も私達に感謝の言葉を言う。すると、雪乃が私の耳元で呟いた。

「何か・・・感謝されるのも悪くないね」

今まで知らない人間に感謝の言葉を言われるのは何か恥ずかしいのか、雪乃の顔は少し照れた様な表情だが、嬉しそうだった。

掃除の方はというと、やはり二人多いというのは作業が早く進むもので、あつという間に掃除が済んだ。

「今日はありがとうね。ゴミと鍵は私達がやっつくから。香苗も二人と一緒に帰りなよ」

月島さんがそう言うってくれる。

「それは悪いよ」

「いいよいいよ、私達もゴミ捨て場とか知つとかないといけないし」

月島さんは運び出そうとしていたゴミ箱を香苗の手から奪い取る形でそう言った。

「あ……」

「いいんだよ」

「……じゃあ……お言葉に甘えて……」

香苗は申し訳なさそうな表情で苦笑いしながら言う。香苗は人に親切にすることに対しては気にしないが、されると気にする。いわゆる気遣いだ。

「そいじゃ、僕らは先に帰らして貰おうか」

私達は月島さんの言葉に甘え、教室を出た。今日は午前中の授業なので、まだまだ時間はたっぷりある。こんな日は家に帰ってゆっくり昼寝でもしようか、それとも時間が勿体無いので何かするか……。そんなことを考えながら校舎を出て校庭に足を踏み出そうとした時、私の肩をむんずと掴み引つ張られた。

「おい……」

「何……?」

「逃げんなよ」

私の肩を引つ張るのは低い声のポーカーフェイスな雪乃だった。

「きつねうどん」

「覚えていたか……」

「そりゃね」

私は渋々食堂に向かった。

「おお!今日は混んでるなあ」

今日の食堂は以前に比べ人が多い。座れる席も以前よりは少なくなっている。私達と同じ様に、昼食を食堂で済まして帰宅しようと考えている生徒が多い様だ。

とりあえず三人分の席は確保出来た。後は注文をしに行くだけだが、何しろ今日は人が多く受け渡し口での列が長い。しかし並ばないと始まらないので、今日は手っ取り早く注文する為に、席にカバンを置いて三人で列に並ぶことにした。

前から順に七海、私、香苗という順で列に並ぶ。すると、香苗が私に聞いてきた。

「ねえ七海？きつねうどんって何のこと？」

「ああ、今日の数学の宿題あつたじゃない。あれ私するの忘れちゃって、雪乃にノート写させてもらったんだよ。その代償できつねうどんを奢らないといけないんだよ」

「だから朝必死にノート書いてたのか。ぼんやりと覚えてるよ」
確かに香苗はその時にはまだ起きたばかりでうつらうつらしていた。

「それと・・・」

「？」

「イソギンチャクって何？」

「多分それは幻聴だよ」

「そうか、幻聴か」

この子は多分天然だ。そんな私と香苗の会話を聞いて雪乃が肩を震わせ笑いを堪えている。堪えているのを誤魔化したいのか、雪乃が私達に言う。

「今の間に何頼むか選んどきなよ。七海は僕の分のきつねうどん頼んどいてね」

「お金渡すから自分で注文してよ。何か私もよく食う奴みたいに思われて恥ずかしいよ」

「そんなん僕だつて恥ずかしいよ。乙女だから」

「うどん含まなくても沢山頼むだろ」

「会計がややこしいんだよ」

何で私が怒られないといけない？言い返してやろうと思ったが、恐らく雪乃も言い返して来ると思ったので、私はそれまでにして、きつねうどんは私が頼むことにした。

この間はハンバーグ定食を頼んだ。今日は何にしよう？今日はそんなにお腹も空いて無いので軽く単品にしようと思ひ写真付きのメニューの一覧を見ながら考えた。きつねうどんを頼んで麺類を頼む

のは恥ずかしいので麺類はやめておこう。そう思って丼メニューを見た後、親子丼があることに気付き、それに決めた。

「すみません、親子丼ときつねうどん」

私は支払いを済ませた後、親子丼ときつねうどんを受け取り、席に戻った。

「はい、きつねうどん」

「お、待ってました！七海さん、ありがたく頂かせて貰います！」
雪乃にきつねうどんを渡した後、自分の席に座る頃には香苗も食べ物を持って戻って来た。

「今日も二人は沢山食べますねえ」

テーブルの上には沢山の料理が乗って、さぞかし楽しいパーティーが今から始まる様だ。主に丼鉢だが。

私が親子丼が半分食べた頃に二人は一品を食べ終わる。よく食べるのは健康的なのかも知れないが、この風景はどうも不健康に見える。別々に急いで食べているのでは無いが、ちゃんと噛んで食べているのか心配だ。私が食べ終わる頃に二人も全て食べ終わる。このタイミングは何か論文の一つでも書いてしまいたいそうだ。

「あー、お腹いっぱい」

雪乃がお茶を啜りながら言う。なんとも幸せそうな顔で。

「お弁当も良いけど、やっぱり炊きたてのお米が良いよね」

続いて香苗が言う。これを見てみると、日本の米の消費率が下がっているというのが嘘に思えてくる。この子達の炭水化物の摂取率は尋常じゃない。

「今日は寝ないですよ」

「了解。食べた後すぐに寝ると牛になっちゃうからね」

牛なんて想像も付かない体系だ。そんな体の牛が居たら栄養不足だ。

私達は食事を終えた後、まだ多くの生徒が席が空くのを待っている。このまま席を占領するのも気まずいので、食べた後の食器を返却口に返してから食堂を後にした。

学校を出て坂道に差し掛かる。そこで、雪乃は今朝見せた様な表情で桜を眺めていた。

「雪乃って桜好きなの？」

「え？何で？」

「いや、朝もじつと見てたから」

「ん・・・特別好きという訳じゃないけど・・・まあ、好きかな。花は散るから美しいって言うけど、やっぱり咲いてる時が一番輝いてると思うな・・・」

雪乃はそう言いながら少し寂しい表情をした。坂を下りながらも桜を見ていて、雪乃はいつもより口数が少なかった。

「それじゃ、僕はこっちだから」

坂の麓に着くといつもの様に雪乃と別れ、私は香苗と一緒に帰ることにした。

「あゝ、午前中だけつての楽でいいね」

私は大きく伸びをして香苗に言った。

「お昼も食べたし、午後はゆっくりだよ。七海は午後から何か予定はあるの？」

「いんや、特にすること無いよ」

「じゃあ、少し家に寄つてく？」

香苗の家。そういえば昔から香苗の家は大きいことから、私達の遊び場の一つになっていた。香苗の部屋も大きく、格好良く言えば私達の集会所として使われていた場所である。この間家の前までは行ったが、中には入ってないので、家に行くとなればかなり久しぶりだ。

「いいの？久しぶりだなあ」

「雪乃も今から呼ぶ？」

「いや、雪乃はもう電車じゃないかな？」

「あー、家遠いみたいだもんね」

一応雪乃に連絡を試みたが、「ごめん、もう電車くる〜」と言ったので残念だが雪乃は来る事が出来ない様だ。

「雪乃もう電車だわ」

「残念。雪乃も中二以来なのにね」

という訳で、私は香苗の家に久しぶりに遊びに行くことになった。昼食も済ませたので、香苗の家に寄って帰ることを家に連絡して香苗の家へと向かった。

普段とは違う方向へ曲がり、こちらは少し住宅街の様になっている。この辺りは昔から別荘地とされていて、比較的大きな家が建てられている。ハウスメーカーが建てた似たような形の家が数件並んでいれば、昔からの大きな和風の家も建てられている。

その先を真直ぐ進んでいくと、ようやく香苗の家が見えた。香苗の家は二階建ての大きな家だ。白い壁で落ち着いた雰囲気である。香苗が門を開け、私達は中に入る。

「わあ、懐かしい！池も！」

私は懐かしさのあまり、つい庭に向かって走って行ってしまった。池の中を覗き込む。

「おお、鯉が居る・・・」

池の中には数匹の錦鯉が泳いでいた。白地に赤の綺麗な模様だ。私が池の前で屈むとエサを貰えると思っているのか、口をパクパクしながら近寄って来る。

「この鯉は新しく入れたんだよ。この前鳥が来て持って行っちゃったんだ」

「あら・・・」

この鯉達も池の中で約束された食料を与えられ、安心して暮らしていると思っていたが、どうやら外部からの危険はいつぱいの様である。

しばらく鯉を見物した後、私達は香苗の家の中に入った。

「おじやましーす」

広い玄関だ。私の家の倍程の大きさがある。最後に来たのは五年前前だろうか、そこ頃のことはまだ覚えていて、あまり変わってない気がする。

私は靴を脱ぎ家の中上がり、香苗は奥の部屋に行った。

「あー、誰も居ないみたい。とりあえず私の部屋に行つといて」

「確か階段を上つて左の部屋だよな？」

「正解！良く覚えてたね」

「そりゃ、昔良く来たから」

私はそう言った後、香苗に言われた通り香苗の部屋に向かった。床や階段は木で出来ていて、太陽の光に反射していてピカピカしている。ソックスを履いたままの足で歩くとツルツル滑って階段は手すりを持たないと危ない感じた。昔よく下りるとき転んだのを覚えてる。

階段を上り終え、左の部屋のドアを見ると「カナエ」と書いたプレートが掛けてあった。私はそのままドアを開け、香苗の部屋の中に入る。香苗の部屋は昔とは違った雰囲気だった。昔はぬいぐるみなどが窓際に沢山飾っていて部屋の色もカラフルだったが、今は何も置いていなく全体的に落ち着いた色で少し大人びた雰囲気になっている。

とりあえず香苗が来るまで待つておこう。昔よく来た所だからいっていきなり寝そべったり、ソファーに座ったりするのは失礼な気がして、とりあえず何も無い地べたに座つて待つことにした。地べたといつても部屋に引き詰められたクリーム色のカーペットはフカフカしていて、まるで座布団の様な座り心地である。

しばらく部屋を眺めいるとドアノブを捻る音が聞こえ、ドアが開くと同時にペットボトルとコップと箱に入ったお菓子をを持った香苗が入ってきた。

「ごめん、こんなのしか無かった」

「いいよいいよ、そんな気遣わなくて」

私の前にそれらを置いた後、香苗も私と向かい合う形でその場に座る。

「何か香苗の部屋変わったね」

「そう?」

「うん、前はもつと可愛らしい感じだった」

「今は可愛らしくない?」

「いや、そういう意味じゃないけど……。何か、大人っぽくなつた気がする」

「そりゃもう高校生だし。でも、昔は雪乃が持ってきたバットとか釣り竿が置いてあつて、一眼に可愛いとは言えない部屋だったよ」
「そう言われればそんな気がする。昔、雪乃が持って来ては忘れて帰る物が香苗の部屋を占領していたことが」

「これはちゃんと残して持ってるけどね」

香苗はそう言つて立ち上がり勉強机の上に飾つてある物を持ってきた。

大きな貝殻である。

「七海、これ覚えてる?雪乃がくれた貝殻」

「雪乃がくれた……」

「そうだよ、秘密基地を作った時に雪乃がくれた貝殻。秘密基地に入る為にはこの貝殻が無いと入れない、いわゆる鍵。そして、仲間の証だつて。雪乃がそう言つて私達二人にくれた」

言われてみれば……。

「いやー、遂に完成したな!」

「意外と大きいのが出来たね」

「ダンボール結構使つたからね」

私達三人は目の前にあるダンボールで作られた『秘密基地』を前

にして、達成感に浸っていた。大きさは四畳半くらいの広さで、小学生の私達からしたら十分過ぎる大きさだ。カッターナイフで開閉式の窓も作っていて、中から外の景色が見れる工夫もしてある。

「とりあえず中に入れてみようよっ！！！」

雪乃が興奮気味に言い、基地の中に飛び込んだ。その雪乃の後に続いて私と香苗が基地の中に入る。基地の中は既に窓が開けられていて、そこから日差しが入っていて、電球やろうそくが無いにも関わらず明るい。本を読むぐらいなら十分な明るさだ。

「んー、結構落ち着くね」

香苗が横になり大の字になってくつろぐ。一方、雪乃の方は忙しそうに、持ってきていたリュックから数冊の少年雑誌を取り出して隅に並べている。

「雪乃？何してるの？」

「ん？こうして置いとけばいつでも好きな時に読めて便利だよ」

雪乃はそう言ってリュックの中に入っていた雑誌を並べ終わると、お菓子やジュースを出して開封する。みるみる新品の基地の中が散らかり、既に使い古された倉庫の様になっていった。それから私達は特別何かをする訳でもなく、お菓子を食べながらジュースを飲み、延々と会話をするだけだった。

「ん・・・今何時？」

「あ、もうそろそろ五時になるよ」

「じゃあ、そろそろ帰ろうか？」

五時になつたら家に帰る、というのがこの町の小学生の決まりだった。私達は基地から出ると、外は既に夕空になっていて西の空が眩しい。さて、そろそろ帰ろうかと思い、足を踏み出した時雪乃が私達の足を止めた。

「ちよつと待って！二人に渡す物がある！」

「ん？渡す物？」

私と香苗が足を止めて雪乃の方を見る。

「うん、これ・・・」

雪乃がリュックの中から三枚の貝殻を取り出す。大きな貝殻でホタテの様な貝殻だ。どれも同じくらいの大きさで鮮やかな模様をしている。

「わあ、綺麗な貝殻だね」

香苗が目をキラキラ輝かせながら貝殻を見つめる。

「これ、鍵……」

「鍵？」

「うん、これが無いと秘密基地に入れない。いわゆる鍵。みんな好きな一つ取って」

「それいい考えだね！秘密基地って感じがする！」

私は中から青っぽい貝殻を選んで受け取った。香苗は緑色の貝殻、雪乃は最後に残った黄色い貝殻を手につ。

「ねえ雪乃、これどうしたの？」

「昔ね、庭掘ってたら見つけてね、綺麗だし三枚あったから採っておいたんだ。ほら、この辺り昔海だったっていうじゃない？」

そういえばそんな話を聞いたことがある。私達の町は海に面している、そして十数年前まではこの辺りも砂浜だったと。今でも土を掘ればたまに貝殻が見付かるとも聞いた。

「鍵なんだから絶対無くさないでよ！」

「うん、わかったよ」

「それに……それは……」

雪乃にしては珍しく真面目な、そして少し頬を赤らめて言う。

「これは、僕ら三人の仲間の証だから！絶対に無くすなよ！」

「うわ！あいつ子供ながら何か恥ずかしいこと言ってる」

「そんなこと言っちゃかわいそうだよ。折角雪乃が見つけてくれたんだから」

私は当時のことを思い出した。確かに雪乃は貝殻を私達にくれ、それを私達三人の仲間の証と称した。先ほど恥ずかしいことなどと

言ったが、雪乃はそれだけ私達のことを大事に思い、失いたくない仲間だと思ってくれていたのだろう。正直にその気持ちは嬉しいし、私も雪乃と香苗は失いたくない一番の仲間だった。私が引越す前日の雪乃と遊んだ日、あの時は本当に辛かった。

「七海はまだ持つてる？」

「え？」

捨てていないのは確かだが、どこにしまっただろう……。雪乃があれだけの気持ちでくれたものだ、それをどこにしまったのか覚えていないなんて。今まで貝殻の存在を忘れていた自分に無性に腹が立ち、雪乃に対して申し訳なかった。

「多分……。どこかにはある筈だけど……」

「でも、捨ててないなら……。大丈夫だよ！」

「……。……。……。……。……。……。……。……。」。

そんな話しをしていたら貝殻のことが気になって仕方が無かった。

「ごめん香苗、どうしても気になっちゃって……。……。……。今から探しに帰るよ」

「うん、その方が良いと思う」

そう言っつて香苗は微笑んでくれた。折角家に招待してくれた香苗には申し訳無いが、今は貝殻のことが気になって仕方が無かった。

家の玄関まで香苗が見送ってくれる。私は少し早足で来た道を通り、自宅へ向かった。早く帰りたい気持ちで、家までの距離が無性に遠く感じた。

家に着き、そのまま階段を駆け上り自分の部屋に入る。

「どこだろう？貝殻」

まずは押入れのふすまを開き、中に入っているダンボール箱を数個取り出した。確か引越し前に本や雑貨はダンボール箱に詰め込んで持ってきた。一つ目のダンボール箱を開けると中に二つ工具入れの様なボックスが入っていた。その内の一つを開けてみるた。

「あ！これは……。……。！」

中には凄い数の貝殻が入っていた。しかし、どれも小さい物ばかり

りで雪乃にもらった手のひらサイズの貝殻とは程問い物ばかりだった。

「少し期待したんだけどなあ……………」

諦めず次のボックスを開く。その中には工具入れの通り工具しか入って無かった。ダンボール箱は全部で六個ある。私は次から次へと開封し中を調べた。中は古い物ばかりで期待が募る。三個目、四個目、五個目、どんどん開封するが中からは古い本やおもちゃしか出て来ない。そして、最後の段ボール箱を開封する。

「あ……………」

最後のダンボール箱の中身は衣類しか入ってなかった。恐らく引越して来る時に、冬服をまとめて入れた物だろう。その後、試しにベッドの下も探してみたが結局貝殻は見付からなかった。一気に体全体の力が抜け、そのまま床に仰向けになった。周りを見ると物の見事に部屋の中が散らかっている。工具に本、昔使っていたおもちやに大量の小さな貝殻。よくこんな物今まで残していたなと感心し、それらが今は雪乃がくれた貝殻で無いことに腹立たしく感じる。私は仕方なく体を起こし、散らかった物を洪々片付けた。

「どうしてだろ……………まさか、捨てちゃった」

そう思うと目頭が熱くなって、目から涙が溢れて来た。貝殻をもらってから二回の引越しをしている、その間に捨ててしまったという可能性は十分にあった。私はそのまま片付けを続けたが、その時も目から涙が流れたままだった。

片付け終わった後、こんな顔親に見られたら変に思われると思い、一階の洗面所で顔を洗おうと思いい、部屋を出た。

一階に下り、顔を洗い終えて二階に戻ろうと思った時、何やらいい香りがするのに気が付いた。その匂いは食べ物匂いでは無く花の匂いだった。

「お母さん？この匂い何？」

一階の居間でテレビを見ている母親に私は尋ねた。

「これ？これ前に香苗がくれたお線香だよ。ラベンダーの」

「お線香？」

思えば私は中学の頃流行に便乗して、少し調子に乗りアロマの線香（百円均一）を集めていた。しかし、途中で飽きてしまいほとんど母親にあげてしまった。

「そういえば、そんなん集めてた……」

私は一階から皿とマッチを持ち出し、部屋に戻った。線香のほとんどは母親にあげたが、少しは私も残している。とりあえず今は少し落ち着きたかったので、私は自分の部屋で線香を焚くことにした。
「確か、竹の匂いつてのがあったよね」

私は線香が入っている勉強机の一番大きな引き出しを開けた。中からは棒状の『竹のかほり』と書かれた箱が出現し、私はその箱を開け、棒状の線香を二本取り出しマッチで火をつけた後、皿の上に置いて匂いを楽しんだ。

「なんとなく……落ち着く……。てか竹つてこんな匂いなんだ」

竹の匂いがイマイチ分かっていない私だが、いい匂いなのは分かる。五分程経つと部屋の中が線香の匂いでいっぱいになった。

「おお、凄い。何か他に種類無いかな？」

少し私は元気になり、匂いの凄さを改めて感じさせられた。私は更なる匂いを求め引き出しの奥を探る。確かもう何種類か所持していた筈だ。奥に手だけを入れ探ると何やら先程見つけた線香の箱の様な感触を感じ、引き出しの奥から取り出した。

「痛っ！」

その時だった、人差し指の甲に痛みが奔った。箱を取り出すときに何やら硬く鋭い物に擦った様だ。指を見ていると赤い線の傷が出来ていて、血が少し滲んでいる。引き出しの中に何かあるのだろうか？そう思い、引き出しを目一杯引っ張り出した。

「！！！！！！」

その引き出しの奥から見付かった。

雪乃から貰った貝殻が。

「あ……あつた……」

私は貝殻を持ったまま引き出しの上につつ伏せに倒れ込んだ。全身の力が抜ける。

「あああああ……良かったよ……」

良かった……本当に良かった。頭の中にその言葉が過ぎる。半分見付かることを諦めていたが、最後にこんな所で見付かるとは。しかし、あつて本当に良かった。そして、私はまた目から涙が溢れて来たが、それは先程とは全く違う涙だった。

私は香苗と同じ様に勉強机の上に貝殻を飾った。こうして見ると、意外と良いインテリアとして見えそうだ。

体の緊張が解れ、今夜の夕飯は非常に美味しく頂くことが出来た。そしてその後、貝殻が見付かったことを香苗に連絡した。香苗は自分のことの様に喜んでくれた。

これが私達の仲間の証。

これからはちゃんと置いておこう、絶対に無くさない。

私は心にそう誓った。

最終章

高校生になってからの初めての日曜日。という訳で昨晚は夜更かしてしまい、今日起きたのは昼前の十一時になってしまった。日も既に高く、テレビをつけてもいつもとは違う番組ばかりだった。初めての食事は朝昼兼用である。

食事を済まし、特にすることも無い私は商店街の本屋に行くことにした。これと買って買う予定の本も無いが、折角の休日だ、家でダラダラ過ごすのも悪くはないが、それはそれで勿体無いと思った。家を出た頃には一時を過ぎていた。食後の運動がてらに歩いて商店街に向かう。財布の中身は三千八百六十二円、今月はこれで生きていけないといけない。少なからず学食での出費がこたえているのだろう。

そんなことを考えながらいると既に商店街の近くまで来ていた。日曜ということだが、商店街には人は少なく幾つか閉まっている店もある。私達が良くコロッケを買っていた精肉店も危なかったのも分かる気がした。最近ではスーパーへ買出しに行く人が多くなっているのが現状である。

目的地の本屋というと、ここはまだ競合する相手が居ない様で、多いとはいえないが少なからずの客は入っている。あまり出費が出れない私が入るのも申し訳ないが、とりあえず暇つぶしに利用させて貰うことにした。

本屋の外には雑誌が並べられている。とりあえず私はそこで雑誌を眺めた後、数冊手に取りページを開き暇つぶしをした。五分程だろうが、外で立ち読みをしていると何やら視線を感じてしまう。別に誰も見て無いだろうが、道に面していることもありどうも落ち着かない。私はその後店内に入った。入ってすぐの所には最近出た雑誌や漫画が積まれていて、店員が作ったのだろう、宣伝用のポップも飾られている。

とりあえず私は店内を一周することにした。まずは漫画コーナーから始め、次に小中学生教材のコーナーを通る。次に資格教材のコーナーを過ぎて雑誌コーナーに差し掛かった時に、見慣れた後ろ姿を私は見つけた。

「かーなーえ」

「ん？あ、七海！」

そこには『楽しい家庭菜園』と書かれた本を読む香苗が居た。

「何？香苗、野菜でも作るの？」

「んー、まだ未定だけど、庭が空いてるからやってみようと思っ
てね」

確かに香苗の家の庭は大きいし、池があるが場所は十分に残っている。また、高いマンションなども周りには無いので、日当りは抜群だ。野菜を作るのには最適の場所だろう。

「ちょうど図書券もあるし買おうかな」

香苗はそう言って財布から千円の図書券を出した。なんでも街角アンケートに回答したら貰ったらしい。

「それいくらするの？」

「八百六十円。お釣が来るね」

結局香苗はその図書券で『楽しい家庭菜園』を購入した。レジで本の入った紙袋を渡され、上機嫌で帰って来る。

「えへへ、結局買った」

私達はその後一緒に店を出た。

「あーあ、明日からまた学校かぁ・・・」

「そうだね・・・」

「？」

何故か香苗の声はどこか元気が無く、寂しそうだった。いつもなら「あはは、来週は土曜も休みじゃない」などと言うのに。私は不思議に思い香苗に声を掛けようと思ったその時だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私達の前に雪乃が立っていた。

「あ、雪乃」

私は雪乃に気づき、声を掛けた。

「………ごめんね、二人とも」

よく分からないが突然雪乃が私達に謝った。私は視線を雪乃からゆっくり左に向け、香苗を見るとそこには俯いている香苗が居た。どうしたんだ？

「付いてきて……」

雪乃は私達にそう言つと、返事も聞かず歩き始めた。

私達は雪乃に言われるがまま後を追つた。その時の私達は一切会話が無かつた。というよりは二人は一向に口を開く様子は無く、私も何か話し出せる様な空気じゃ無かつたのを察知した。香苗を見る限り、香苗は何か知つている様だ。この二人が何か喧嘩でもしたのだらうか？でもそれなら先に雪乃が謝つたのなら香苗なら「別にいいよ、私こそごめんね」と言うだらう。そして、先程雪乃は「ごめんね、二人とも」と言い、私にも謝つた。

結構歩いている、そして足取りも重い分遠く感じる。

どんどん街から離れ、田舎の景色が濃くなつてゆく、こつちに来てから街の方へは良く行つたが、こちらには来ていない。幼い頃には行つた覚えはあるのだが。

少し山道なる。

その山道を登り終え、頂上に着くとそこは私達の膝くらいまで伸びる草が茂つた、とても広い場所だつた。

そして、雪乃がそこで立ち止まつた。

「ごめん、ちょっと遠かったね・・・」

苦笑いしながら雪乃が振り向く。

頂上ということもあって、風通しが良く、振り返った雪乃の髪の毛、カーディガン、スカートの裾が膝まで伸びた草とともに揺れている。

私は周りを見渡した。周りには木と草しかないが、それが逆に新鮮に感じる。そして、私はここが昔私達が遊んでいた場所で、秘密基地を作った場所であることを思い出し、そしてもう一つ、この間夢で見た場所だと分かった。

「ここって・・・、秘密基地作った場所だよな？」

「お！良く覚えてたね！そうだよ、その木の下にね」

雪乃はそう言っただけで秘密基地を作ったという木の所を指差した。

「ここにまた三人で集まれるなんて思っただけ無かったよ・・・」

悲しそうな顔をして雪乃が言う。

「ねえ、七海」

「何？」

「貝殻見つけてくれたんだってね？ありがとね」

貝殻・・・。雪乃は私が貝殻を見つけたことを知っている。香苗から聞いたのだろうか？

「雪乃知ってたんだ。雪乃もまだ持ってる？」

私がそう言うと、雪乃は微笑みながらポケットから大きな貝殻を出し、ひらひらと私達に向けて見せた。

「仲間の・・・証だろ」

やはりその言葉を言うのは恥かしいのか、頬を赤らめながら言う。そして、雪乃が私達の所まで歩み寄ってきて、俯いていた香苗の肩に手を掛ける。

「ごめんね香苗、本当にごめん」

雪乃がそう言うと、香苗は俯いたまま首を横に振る。

「香苗は・・・途中から気付いてたんだよね」

その時だった、突然香苗が雪乃に飛び付き泣き始めた。

時だ。

「その時にさ、香苗泣いちゃったみたいだね。多分その時ぐらいに香苗は薄々気付いてきたんだと思う。まあ、香苗は元々僕が死んだことも知ってるしね。今だけ僕が生きてることで、僕は中学生の時に転校したことになるんだよ。でも……」

「でも……?」

「香苗が泣き出しちゃった場所覚えてる?あそこ、僕が昔住んでいた団地の近くだよ」

「そういえばそうだ。私がこっちに来た時に雪乃を訪ねる為に行った団地の近くだ。」

「多分、近くに着たから何だかの拍子で気づき始めちゃったんだと思う」

香苗は雪乃が死んだことは知っていた様だ。しかし、今は雪乃が一時的にこの世に存在していることにより一般では転校したことで認識されているらしい。

「でもあんた……死んだって……何で……」

「うん、家族皆だね……交通事故にね。結構派手だったみたいだよ……」

「お母さんも……お父さんも?」

「うん……みんな……」

だから家を訪ねた時も誰も居なかったのか……。そして、雪乃の話しを聞いていく内に、私も雪乃が既にこの世の人間じゃ無いということをしらず認識し始めたと同時に、目から涙がこぼれ始め、体が少し震えてきた。

「でも……何で今は生きてるの……?」

確かに雪乃は今ここに居る。触ることだって出来る。何故その死んだ筈の雪乃が今ここに存在をしているんだ?

「うん、目的を果たすためにね」

「目的……?」

「うん、七海って小学生の時に転校したじゃない?だから……」

・ちゃんとありがとうが言えてなかったから。それで、高校生になつて七海がこっちに帰つて来るって知つてね、それに、香苗と同じ学校だつて言うからさ……」

雪乃の目からも少し涙が流れ始めている。

「今度はちゃんと言つね。二人とも今までありがとう」

雪乃が香苗の頭を撫でながら言う。そして、私もその言葉にたまらず声を上げて泣き出してしまった。

「雪乃……うああああああああ」

私も思わず香苗と同じ様に、雪乃に抱き付いた。まるで子供が泣きじゃくる様な大きな声を出して。

その私達に対し、雪乃は優しい目をしながら私達の頭を軽く撫でた。

泣きだしてからどれくらい経つただろうか。二十分、いや、三十分程だつただろうか。まだ体は震えているが、なんとか落ち着きは少し取り戻した。

「ねえ、雪乃、香苗……聞いてくれる？」

優しい声で雪乃が私達に聞く。

「あにね、それともう一つ目的があつたんだ」

「……もう一つ？」

落ち着きを取り戻した私が、少し震えた声で聞いた。香苗も今では落ち着いてきている。

そして、雪乃がポケットに手を入れた瞬間、辺りが真っ白な光に包まれた、それはまるで発光弾を目の前で爆発させられた様な眩しさだ。私達は思わず顔を覆い目を塞ぐ。そして、恐る恐る私達は手を顔から離し、周りを確認した。

それは、今までと同じ場所だが少し違う。そう、私が夢で見た景色そのもの、私達が幼い頃に遊んでいた頃に。

「もう一つは……これ」

雪乃は貝殻を見せて言った。

「貝殻？」

「うん、これを探しに来てたんだ。実はね、僕もこの貝殻何処にしまったか分からなくなってたんだよ。七海一回僕の家を訪ねて来たでしょ？」

「うん、表札が無かったけど・・・」

「あの時も家の中で探してたんだ。ノックされて焦ったけどね」

「だから、学校帰りに一人で・・・」

「うん」

雪乃の家は現在誰も住んでいなく、部屋の形もまだ残ったままです。たまに親戚が来て片付けているらしい。もちろん元々は雪乃の家だ、雪乃も家の鍵は持っていて好きな時に何時でも家に入ることが出来る。

「そして・・・やっと見つかった・・・」

雪乃が安堵した表情で言う。

「ずっと望んでいたことが果たされた・・・二人にちゃんとさよならして・・・仲間の証である貝殻も見つけることが出来た・・・。偶然にも雪乃と香苗も貝殻を思い出してくれた・・・」

雪乃は空を見上げそう言った。私達も続いて空を見上げる。もう五年程昔の景色だ、私達は確かにこの空の下に居た。

「ここ・・・懐かしいね」

「うん、昔のままだね・・・」

「あの山道もよく登ったね」

私達は辺りを見回した。凄く綺麗な。今はちゃんと木の下にダンボール箱で作られた例の秘密基地も残っている。

何もかもが懐かしい。

私達はしばらくその懐かしさに浸っていた。その後だった、雪乃

が口を開いた。

「今日でもう……お別れだね……」

「雪乃……行っちゃうの？」

「うん、目的は果たせたからね……。やっぱり辛いけど仕方ない……」

悲しそうな表情をする。

「雪乃……」

今日でもう雪乃とは会えなくなる。嫌だよそんなの……。

「ねえ雪乃……なんとかこっちに残れないの？」

「ごめんね、それはどうしても出来ないんだ……。今、こうしてられるのもやっとなんだよ」

「……」

三人の間で少しの沈黙が起きた。

「ごめんね……。僕のわがままに付き合わせて、辛い思いさせちゃって……。本当にごめん……」

「ううん……。そんなこと無いよ……。私も雪乃と会えて良かったよ……」

「うん、私もちゃんと雪乃にさよならできて良かった……」

「二人とも……ありがとうね……」

雪乃の声が震えている。その時だった、今度は雪乃が私達に抱きついた。

「うづうづう……七海……香苗……」

雪乃が声を上げて泣き出した。いつも強気で大声で泣いたところなんて見たことは今まで無い。そんな雪乃が今、声を上げて泣いている。

そして、私達もそれにつられまた泣き出してしまった。

「雪乃……うづうづう……」

「ありがとう……ありがとうね……」

雪乃が腕の中で震えている。
手から雪乃の感覚が弱まる。

「雪乃………」

雪乃の姿が消えかけている。
だんだんと薄れていく。

「七海、香苗……僕は本当に二人と出会えて良かったよ……」

「私も……私もだよ………」

「だから、最後ぐらいは笑顔で見送ってよ」

「うん……そうだね」

そして、やがて雪乃の感覚が無くなり、完全に姿が消えた。

「ありがとう………さようなら………」

そんな声だけが最後に聞こえた。

既に周りの風景は元に戻っている。

今までのことは何も無かったかの様に。

私はその晩、また懐かしい夢を見た。

「ああ……」

「グチャグチャだね……」

「びつしよりだよ……」

梅雨の連日続いた雨は流石に耐えられなかったのか、私達の秘密基地は雨によって破壊されていた。中に置いてあった雑誌も読める状態では無かった。

「うわあ、もう全て駄目だね」

「何か……汚いね……」

もう潰れた秘密基地というよりは、ただのゴミになっていた。

「ねえ、みんな鍵持ってきてる？」

雪乃が私達に問いかけた。

「うん」

「持っていないと入れないからね」

私達は鍵の貝殻を取り出し、雪乃に見せる。

「今、この貝殻は鍵の役目を終わりました」

「ん、まあ、そうだよね」

「確かに」

鍵があってもそれを使う為の物が無くては意味が無い。

「じゃあ、これどうする？」

「もう一つの役目……仲間の証」

雪乃はそう言って貝殻を天にかざす。

「おお！」

「なるほど！」

私達はその言葉とそのポーズを見て何故か納得していた。

「これを持つてる限り、僕らは何処に行っても仲間です！いいですか？」

元気な声で雪乃が言う。

「わかりました！」

「了解です！」

私達は敬礼をして応えた。

この貝殻を持っている限り私達は永遠に仲間だ。

永遠に

エピソード

いつもと同じ朝の月曜日。

一週間の始まりという物はどうも憂鬱だ。まあ、今週は土曜日も休みというのがせめてもの救いだ。

朝食を済ませ、制服に着替えた後、いつも通り部屋のドアを開け学校に向かう。

その前に。

「……………よし！」

私は気合を入れた。

机の上の貝殻に向かって。

学校までの坂に着くと途中で香苗に会った。

「七海、おはよ！」

少し眠そうだが、いつもの様に笑顔で挨拶をしてくる。

私は香苗と一緒に学校へ向かった。

学校に着くと私達は自分の席に着いた。隣には香苗が頼杖をついてうつらうつらしている。これもいつもと変わらない風景だ。

朝のホームルームも終わり、授業が始まる。

もう授業にも慣れ、一時間目、二時間目と難なくこなして時間が進む。他の生徒も慣れてきたのか時折寝ている生徒もちらほら現れ、教師に注意されている光景も伺えた。

時間が進み、昼休憩になる。

「七海、お昼外で食べない？」

「外？」

「うん、だいぶ暖かくなってきたしね」

仕方ないなと思いながら、私は香苗と一緒に外で食べることにした。

外のベンチに腰掛けながら昼食を楽しむ。ちなみに今日の弁当は私が自分で作ってみた。流石に見栄えはあまり良くない。味はというと……自分で言うのも何だが、悪くは無かった。卵焼きに関しては香苗から高評価を貰うことが出来た。

食事を終えた後、お茶をすすりながら二人でくつろぐ。

少しの間、無言の時間が続いた。お互い頭の中にある言葉は同じだろう。そこで、香苗が重い口を開いた。

「七海……その……」

「うん……」

「何て言えばいいかな……」

「うん、大丈夫。分かってるよ……。香苗こそ大丈夫？」

「うん、大丈夫。元気だよ」

「……」

「……」

「出席番号……一つ前になっちゃったね……」

「そうだね……」

今では雪乃のことは元々この学校には居なかったことになっている。担任も、他の生徒も雪乃が居たことは知らず、同じ学校だった者には死んだことと認識されていた。

この間までの雪乃のことを今でも覚えているのは、私と香苗だけだった。私の斜め前に座っていた香苗は、今では私の横の席に座っている。

「でも何かスッキリしたよ。そりゃやっぱり寂しいけど。でも……何かスッキリした」

「うん、今では良かったと思ってる」

私はそう答えた。

今はもう雪乃は居ないが、私達はお互い本当の最後のさよならが出来た。それだけで満足だった。雪乃は自分のわがままに付き合わ

せて辛い想いをさせた、と氣遣っていたが、私や香苗にとって雪乃が知らない間に居なくなつて最後のさよならが出来ないのは絶対に避けたい。最後のさよならが出来ただけでも幸せだった。

「あー、お腹いっぱいだよ！眠くなつてきた〜」

「香苗、食べてすぐ寝たら太るよ」

「う・・・それだけは・・・」

「じゃあさ、食後の運動でもしようよ」

「運動？」

私は食事をしている時から、グラウンドにある物が転がっているのに気付いていた。私はそのある物を取りに立ち上がり、グラウンドに掛けていった。

「じゃーん、これでキャッチボールしようよ！」

「おっ！ソフトボール！」

ソフトボール部が朝練の時にしまい忘れた物だろう。

私達は食後の運動に、そのソフトボールを使ってキャッチボールをした。

本当に久しぶりのキャッチボールだ。近い場所で軽く投げ合っているがポロポロ溢してしまう。

「あははー、私達腕落ちたねえ」

「もう、手が痛くなつてきたよ〜」

私も手が痛くなつてきたが、それでも何故か嬉しかった。

「香苗！私達ずっと仲間だよー！！！！」

「当然だよ！ずっとずっとね！！！！」

素手でソフトボールを掴む音。それはパシンパシンという音ではなくペチペチといった音だ。そんな音も懐かしく感じる。

その懐かしい音と私達の笑い声は昼休みが終わるまでグラウンドに響いた。

そして、この青い空にも届いていることだろう。

はじめまして。

今回の作品は初めて投稿した作品です。初めてということもあり、おかしな所は多々あったと思いますが、許して下さいね。

さて、今回は「七海」を中心に、その友人の「雪乃」「香苗」の物語です。それ以外の人物はほとんど出てきませんでした。

何かシリアスな物が書きたいと思い今回の作品を書いてみました。書いていく内に三人が可哀相になってきて、最後をこのまま行くかどうか、悩んだこともありましたが……このまま行っちゃいました。特に雪乃には謝りたいと思う気持ちです。ごめんなさい。

今回、読んでくれた人達には本当に感謝の気持ちで、どう言ったら良いのか分かりません。

本当にありがとうございます。

これからも学習して作品を作って行きたいと思います。

その時はまた、御付き合い下さいね。

それでは、最後になりましたが、本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3451i/>

また、この場所で

2010年10月21日22時58分発行